
不二

夢矢わと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不二

【Nコード】

N6680D

【作者名】

夢矢わと

【あらすじ】

束縛されずに生きていける道を探す、藤とセイジの2人の愛を巡って、嫉妬と束縛が交錯しあう。二人が行き着いたのは灰色の空。そこで藤は衝撃の事実を知る。決して共有できない人間の孤独の闇が浮かび上がる。

咲き誇れ藤の花、私は灰色の空の下をどこまでもいける、（前書き）

リアルさを出すため、少々過激な表現がありますのでご注意ください。
い。

咲き誇れ藤の花、私は灰色の空の下をどこまでもいける、

誰もいない、暗い森の中、男は追われていた。月も出ていない漆黒の闇の中を男は走った。男の背後を、追いかける1台の車のライトが照らしている。冷たい、静かな山道で男の激しい呼吸と荒々しいエンジン音が鳴り響いている。男はガードレールを飛び越えると、草むらへ飛び降り、そのまま姿を消した。

車がそばで停止し、中から人が2人駆け寄ってくる。

「だめです。見失いました！」

「撒かれたか。まだ近くにいるだろう。すぐに応援を要請しろ！」

5年後、東京拘置所

大きな大きな湖がありました、

- 小さなお船を浮かべて・・・どこまでいくの
ゆらゆら揺られて、どこまでいくの

遠くの遠くのお星様 静かにみているよ・・・

護衛に連れられて光が差し込む渡り廊下を歩いていると、子供の歌う声が聞こえてきた。

「面会の時間です。娘さんが来てますよ」

そう言われて、面会室に入ると、重々しい音と共に扉が閉められた。前をみるとガラス越しに、妙がスケッチブックに絵を書いていた。

1週間ぶりの面会である。連れ添いの弟が護衛に向かって深々と頭を下げた。弟の芳樹は、服役中の身である私の換わりに、娘の面倒をみてくれている。

「あ、ママ」

4歳になる娘は私が入ってくると嬉しそうに顔をあげて近づいてきた。無邪気に笑う姿を見ると安心して、日ごろの疲れなど吹き飛ん

でしまう。この面会の時間だけが、今の私にとって一番の幸福な時間である。

「妙元気だった？さっきの歌どこで教えてもらったの？」

「宮子先生だよ！妙お歌上手でしょ」

妙はそういうと、何度も何度も同じ歌を繰り返し歌って見せた。

「うん、上手だね。あとでママにも教えてね」

妙を抱きかかえながら芳樹が言った。

「どう？その後は変わりない？」

「おかげさまで。仕事忙しいのに、いつもごめんね。」

「今更何いつてるんだよ。忙しいけど、まあ何とかやってるよ。妙も幼稚園では楽しくやってるみたいだし。妙、幼稚園では結構王テるみたいよ」

そう言っ二人で笑った。芳樹は子供好きで、妙のことをよく面倒みてくれている。昔から他人を放っておけない優しい弟だ。彼がいなければ、今頃私たちはどうなっていたか……。

「俺のことは心配しなくていいから。姉ちゃんこそ、頑張りなよ。もう少しだから。」

「うん。わかってる。妙のことお願いね。」

「姉ちゃん、それとー！」

芳樹がそう言い掛けると、同時に後ろのドアが開いた。

「時間です。戻ってください。」

芳樹は一瞬戸惑ったような表情を見せたが、すぐ笑顔に戻った。

「じゃあ行くわ。妙、おいで。」

面会時間は10分しか許されていない。

「じゃあね、ママ。また来るからね！」

そう言っ最後まで手を振りながら、妙は芳樹に連れられて面接室を出て行った。私は娘の顔を最後まで目に焼き付けていた。

もう少しだから……その言葉に励まされている。そう、後もう少し。もう少しでここから抜け出せるのだ。

私の刑期はあと半年に迫っていた。早ければ、子持ちということ

もあつて、あと3ヶ月程で仮釈放されることになっていた。

その晩は、久しぶりに寒かった。

凍えそうな寒さは、私にあの日の記憶を蘇らせる。寒くて寒くて、凍えそうな日。

果てしなく広がる大きな湖、灰色の空と遠くに見える黒い森。ボートを漕いでいるのは、あなた・・・その後ろにあるものは何？白くて、なんだかとても美しいもの。隠さないで見せて・・・。小さなお船を浮かべて・・・どこまでいくの～
ゆらゆら揺れて～どこまでいくの～

遠くの遠くのお星様 静かにみているよ、静かにみているよ

私は妙の歌で飛び起きた。夢をみていたのだ。真冬だというのに額にびっしょりと汗をかいて、私は泣いていた。まだ意識は朦朧としていて、私は、夢と現実の記憶との間をさまよっていた。

星は、私たちを見ていたのだろうか？いや、星は本当は出ていなかった。あの場所にいたのは私たちだけで、誰も見てはいなかった。誰も踏み入らない私たちだけの灰色の世界。寒い寒い冬の日、あの時からあなたと私の時間は止まったまま・・・。寒さのせいなのか、今日はあなたに会いたくて仕方がない。今どこにいるのーー？早くここから連れ出して。

薄れていく意識の中で、娘の顔を思い浮かべていた。

妙。私の大事な娘。強く、強く、笑って生きていてね。あなたの存在だけが、あの人を私が愛した証なのだから・・・。

山白藤は、いつもより2時間ほど早く起きた。酷い頭痛がする。昨日の酒がまだ抜け切らないのか、少し顔も熱っぽかった。これから仕事前に客と食事をする約束があるというのに、気分が乗らない。同伴の日は決まってくうだ。憂鬱な気分のまま、藤はシャワーを浴びた。バスルームの鏡に映る顔を見ると、クマができていて、

疲れた顔をしている。

急いで髪を巻いて、疲れた顔を隠すためにいつもより念入りに化粧をした。

藤は上京してから4年半、キャバクラで働きながらこのアパートに暮らしている。

カツカツとヒールの音をさせながら、古びたアパートの階段を下りてゆく。アパートを出るとすぐ坂があり、そこを駅まで5分ほど下る。上原駅の裏側は狭い路地が多く、古い民家がいくつも並んでいた。

夕方地下鉄の電車はすいていた。麻布十番で降りると、長いエスカレーターを歩いて上り、2番出口に出る。夕方4時とはいえ、9月はまだ昼間のように日差しが、強く、蒸し暑かった。待ち合わせ場所近くにあった街頭にもたれながら、藤は辺りを見回した。セメントの匂いと生ぬるい空気が充満していた。黒スーツにブランドのバックを手にさげたいかつい男が大声で何か話している、その脇を通行人が慌しく通り過ぎていった。カップルで歩く女の声が見つく。渋滞する車のミラーに光が反射してまぶしく、さらに蒸し暑く感じさせている。

そんな都会の喧騒に、藤は、少し気分をイラつかせていた。前はこんなことで気分をイラつかせることなどなかった。東京に出てきた頃、藤は、ビルに囲まれた都会の無機質な空間が好きだった。排他的なコンクリートの隙間を歩く人々。岐阜の田舎から出てきた藤にとって、東京はこの上ない刺激を与えてくれる街だった。またそうした風景を美しいとすら感じていた。しかし今は、溢れ返る人の群れを見ていると、藤はどうしようもない孤独を感じるようになっていた。

「やあ、お待たせしました」

声を聞いて振り返るとスーツ姿の男が立っていた。客の奥村だ。奥村は50代くらい。長身でやや体格のいい、いかにもビジネスマンという感じだ。

「いえいえ。大丈夫です。久しぶりですね。」

「ご無沙汰しちゃってすまんね。どこ行こうか。僕の知ってるところでいいなら連れてくけど」

「お任せします。奥村さんの好きなところに。」

食事の最中も気分は晴れなかったが、終始会話が途切れないように、気を使った。

「藤って珍しい名前だよ。本名？」

「はい、本名なんです。」

「君の雰囲気はぴったりな名前だね。藤の花は気高い美しさの象徴なんだよ。」

「そうなんですか、知りませんでした。」

「恋に酔う女性とか、歓迎するっていう意味もある。君の場合はちょっと美人過ぎて、少し近寄りがたい感じもあるがね。」

それから奥村は仕事の話や延々と始めた。前にも何度か聞いている話だったが、彼は表参道に自社ビルを何件もっているらしい。そうやって金をちらつかせて、毎晩キャバ嬢をくどき回っているのだろう。金を積むしか能のない客に、藤はうんざりしていた。

あまり口を開かない私に、奥村は私の機嫌を伺うかのように言った。

「君は何か欲しいものは？なんでもいいから言ってみよう？」

いや、それは私も同じか……。私はこの人たちの金にあやかっただけの、それ以下の人間でしかない。

奥村は困ったように笑う私をみて、つまらなそうに言った。

「君は可愛いのに、本当にわがまま言わないな。」

こういう時、私はどういふ顔をしていいかわからなくなる。私は人に甘えたり、ねだったりすることができない。つくづく不器用な人間なのだ。こういう時に女らしく、可愛く振舞えたらどんなに楽だろうか。

店を出た私たちは、そのままタクシーで私が働く六本木の飲食店へと向かった。タクシーに乗っている間、私は、“藤”の名前の由来

について考えていた。今まで自分の名前の意味など考えたことなどなかった。気高い美しさ・・・自分とは正反対だと思った。

店は、六本木通り沿いにある雑居ビルの地下にはいつている。見慣れた階段を下り、メイクルームに入ると、うるさく談笑していた女たちが一斉にこちらを向いた。

「おはようございます。」

そういうと、私はソファーにもたれた。

「おはよう。大丈夫？」

1つ上の先輩である蓮花が声をかけた。蓮花は私が入った時期が同じで、年が近いこともあって、一番親しい同僚だ。

「ただいま。大丈夫。ちょっと疲れてるけど。」

「そっか。私先表いつてるけど、早くおいでね。」

ドレスに着替えて表へ出ると、先ほどの奥村が中央の席に座っていた。まだ時間が早いため客はまばらだった。黒と白のモノトーンで統一された内装、紫のカーペットにショーウィンドウがあり、高級ブランドの限定品バックが並んでライトアップされている。落ち着いた店内。怪しげな光に包まれた空間で、ドレスに身を包んだ女たちの笑い声が鳴り響いている。ボーイがシャンパンを持ってきて、グラスに注いだ。浮いては消える、シャンパンのきれいなゴールドの泡を私はじっとみつめた。

水商売は、客の機嫌を損ねたら終わってしまう、見栄とプライドの世界。つい昨日まで親しく関わっていた人が今日には他人で、もう一生会うことのない関係になっている。すべてはその繰り返し。客も、女も、金も、どんどん入れ替わっては消費されていく。成り上がって金を手にした者だけが、入ることが許される世界。

「乾杯！」

グラスを傾けると、ゴールドの泡は輝きながら揺れて、すぐに消えてしまう。私はいつ、消えてしまうだろうか……。

夜のきらびやかな世界に憧れて、この仕事を始めた。ネオン街を行き交う男女は皆垢抜けていて、美しく見えた。浅はかだったとは思わないが、客をとれるようになるまではそれなりに苦勞もした。お客が付き、高いブランド品を身につけられるようになる頃は、生活も安定してきた。すると今度は今の自分から落ちたくないという気持ちに駆られていった。わずかながら仕事に対するプライドが芽生えてきてしまう自分が、どうしても嫌いだった。プライドなんてくだらない。ただ虚しいだけなのに。

接客をしている間は、名前の話しのことなど一切忘れていた。いつも通り、客と取り留めのない話をしながら、時間が過ぎていった。「本当にきれいだよ。君、今夜は店終わったら空いてるの？」そういつて奥村は、私の手を握った。その夜私は、奥村に抱かれたのだ。

セックスしている間、奥村の愛撫を受けながら、私はバスルームに目をやった。ドアが半分開けっ放しになっていて、奥の暗闇をのぞかせた。

暗闇はいつも私に、父の姿を思い出させる。

岐阜の田舎に生まれた私は、弟と共に父方の祖父母に育てられた。母は2歳違いの弟を産んで、すぐ男と蒸発してしまった。大酒飲みだった父は、幼い頃からめったに家にかえってこなかった。朝から酒を飲んで、仕事もせず、パチンコにあけくれ、町をうろついているようだった。たまにかえってきては、家の奥に閉じこもり、寝ているだけだった。

ある日の深夜、急に窓から光が入って目が覚めた。車のドアがしまる音とともに、若い女の声が聞こえた。荒々しく扉の開く音がして、かなり泥酔している父の声と足音が聞こえた。足音は奥の父の部屋へ向かっているようだ。

私はもしかしたら父と一緒に、母親が帰ってきたのかもしれないと

思い、声のする父の部屋へ起きていった。襖を少し開けて暗闇から覗いた。

「お母さん？」

返事はない。そこにはしゃがみこんだ髪の毛の長い女の後ろ姿と、肩を抱いてキスをする父の姿があった。

父は私に気づくときよっとしてキスをやめた。

「何見てんだガキが！」

そう怒鳴ってこちらに歩み寄ると、襖を勢いよく空け、私の腹を蹴り上げた。痛みと驚きで気が動転している私の頭を、父はすかさず拳で殴りつけた。

「そんなのほつといて、こっちにきてよ」

女が言くと、父は手を止めた。

襖が閉まると、私は恐怖で凍りついた。怖くて声も上げられず、私は暗い廊下にしゃがみこんでいた。

家に置かれた古いベットは良く揺れる。ギシギシと揺れるベットの音が鳴り響く廊下で、私は耳を塞いでいた。

翌朝、祖父と祖母は昨晚の出来事を知っていたらうに、それに関しては何も触れなかった。父については何も触れてはいけないうな空気が流れていた。幼い弟も、それを察してか、両親について誰かに聞いたりすることはなかった。この家は何かがおかしい。成長するにつれて私はそう確信していくようになった。

それ以来、父は私に暴力を振るうことはなかったが、私と弟は前にも増して、父に寄り付かなくなっていた。中学にはいっても、父との距離は縮まることはなかった。私は彼のことは好きではなかったが、憎むことはできなかった。父の心に潜む闇が何なのか、私は知りたいと願っていた。

事を終わらせた奥村は、そのまま疲れきって眠ってしまった。翌朝も、一人ですばやく身支度をすませると、そそくさと部屋を出て

しまった。昨晚の紳士的な態度とは代わって、私になど目もくれず、もうお前とは関係ないんだと言わんばかりだ。

この日、エレベーターの中から見た景色は、どこまでも続く暗い空。果てしなく灰色で、泣きたくなるような空……。それは、この先の自分の前に横たわる不安を予期しているようで、私の心は震えた。ロビーに着いた後、2人は距離をおきながら歩いた。奥村はそわそわと落ち着かない様子だ。私と一夜を過ごしていたことを、知り合いに見られたくないと思ったのだらう。こういう時、男は気が小さいものだ。

外に出て、別れ際に奥村が私に言った。

「何か……、僕には君の考えていることがわからないよ。」

よくキャバクラ嬢と客が恋愛関係になるという話をきくけれど、私の場合、客に恋愛感情を抱くことなど、まずないだろう。私は人が自分の心に踏み入ってくることを極端に嫌った。人に自分の心をさらけ出すことができない不器用な自分が嫌いだった。こつちに来たからの私は、どんどん孤独になっていった。昔からの知り合いもいず、蓮花や同僚とは仲が良いが、それは仕事上の付き合いでしかなかった。

私はがむしゃらに仕事をこなした。金を貯めてやりたいことや、何か夢があったわけではない。それほど金に執着していたわけでもなかった。けれど私は客との一夜限りの関係を続けていた。そうしていても、この先の私に待っているものなど、何もないというのに……。私は肉体的な快樂でしか、孤独のさびしさを紛らわすことができなかった。例え一夜限りであっても、私にとっては唯一の安息の場所なのだと思いたかった。……しかしそれも、もうダメかもしれない。どんなに抱かれても安らぎは一瞬で終わり、後はまた繰り返し返される孤独にさいなまれるだけで。

私には、何も無い……それが私の日常。

金、権力、名声・・・この世が成り立っているすべて。皆生活をするために働くのだ。欲を満たすために。けどその全てを手に入れてしまったら、人は一体何を望むのだろうー！。

祖母は、父のことを溺愛していた。どんなに酔っ払って帰ってきて、父をしかろうとはしなかった。祖母は父が夜な夜な酒を飲んで帰ってくることを、内心では良く思っただけはなかったはずだが、私や弟が父の悪口を言うことを彼女は許さなかった。遊ぶ金も祖母が父に渡していた。

まだ高校生だった頃、私は夜遅くに家に帰った。当時私の交友関係は荒れていて、生活も不規則だった。

「こんな恥さらしなこととして、人様に知れたらどうする気だい！お前はあの女そっくりだよ！」

頭に来た。“あの女”とは母のことだ。自分のことをとやかく言われるのは構わない。でも母親のことを言われるのは、どうしても我慢がならなかった。

「なんだよ。自分の息子だって同じようなこととしてたくせに！」
パンツ

頬を叩かれ、わたしは祖母をにらみつけた。

後ろから祖父が、何も言わずこちらを見ていたが、そのまま奥の部屋へいってしまった。

私は母について何も聞かされていなかったの、あまりおおくは知らない。しかし、祖母は私の母親を恨んでいたようだった。父があんな風になったのは、母が男を作って家を出てしまったからだという。“あの女のようにになるな”と、祖母は毎晩口癖のように言った。何不自由なく育ててくれたことは感謝していた。しかし、“お前はあの女そっくりだよ”その言葉が、頭から離れなかった。父をかばいたがる祖母を、私は軽蔑していた。決して祖母のような女に

はならない。私はそう心に誓っていた。

私が高校に入るころ、父は重度のアルコール中毒で更正施設に入れられた。父とはそれ以来一度も会っていない。

私は幼い頃から祖母の働く背中をみて育った。祖母は優しいけれど厳格な人で、誰より祖父を尊敬していた。とてもプライドが高く、時々人を見下すようなところもあった。家を守ることに異常に執着し、いつも世間体ばかり気にしていた。

祖母の手は、いつもひどく荒れていて、赤ギレが耐えなかった。その手で顔をさわられるのが痛くていやだった。顔は日焼けのためシミだらけで、化粧などほとんどすることはなかった。

祖母は、他人の前では、私や弟のことを、両親の仕事が忙しいので一時的に預かっているだけだと説明していた。彼女は何より自分たちが世間から疎外視されるようなことが起きるのを恐れているようだった。そんな祖母を見るのが悲しかった。

当時まだ18歳だった私にとって、祖母の古臭い考えは、窮屈でしかたがなかったし、そうして何かに捕らわれて生きてゆくことを哀れだとも思っていた。それは彼女のエゴでしかないように思えた。なにより、この家の張り詰めた空気から早くのがれたかった。

高校を卒業するとすぐに、私は家を出た。私はこれから何にも縛られずに生きていけると思っていた。

そんな祖母も、1年前に祖父が亡くなって、後を追うように、その半年後に他界してしまった。

昨日にも増して頭痛はひどかったが、その日は日曜日で仕事も休みなので、藤は少し寄り道して帰ることにした。ホテルの前でタクシ―を拾うと、青山の交差点で降りた。さっきまで暗く曇っていた空は、だんだん晴れて、光が差し込んできた。雲の間に青い空が見え

た。午前8時、休日だというのに、交差点はすでに出勤するサラリーマンでいっぱいだったが、表参道を走る車はほとんどなかった。朝の表参道の並木道を一人で歩いた。人もまだまばらだ。ニット帽を被った青年がマウンテンバイクで、まだ締め切つてある表参道ヒルズの前を走り去つた。ここに来るのは久しぶりである。以前ここはツタの葉が生い茂る古いアパートが立ち並んでいた。藤は、その風情あるアパートの風景を見るのがとても好きだった。上京したばかりの頃、その前に座り、高級ブランド店が立ち並んだおしゃれな街を颯爽と歩いていく人たちを見ながら、よく時間を潰していた。朝のひんやりとした空気を吸うと、久しぶりに爽やかな気分になった。次第に体調ももどつていきがした。並木は木漏れ日がさしこんでいて清々しい。わずかにセミの音が響いている。ここはまだ藤に、東京は美しいと思わせてくれる場所だった。日差しの中を閑散と静まりかえつた道を歩いていると、昨晚の夜のことなど、嘘のようだった。

明治通りを渡つてしていると、横断歩道の左手に、大きな広告があるのが目に入ってきた。最近テレビでよく見る若手アーティストの広告だった。その隣に一緒に写る男の存在感に目を引かれた。黒の背景に半分だけ光に映し出された、若い男性の写真。ツバの大きな黒い帽子を目深に被つて、片手で帽子を押さえながら、タバコをふかす姿はクールな大人の印象をうける。吐き出すタバコの煙が、顔の前で立ち上り、帽子からわずかに覗いた目は、その甘いマスクに似合わない、鋭くて少し険しい眼差しだった。藤は歩きながら看板を見上げていた。

・・・誰だろう？ かつこいい人。

藤は原宿を散策しながら、家まで歩いて帰った。着いた頃には10時を回っていた。ソファアに座ると急に体が重く、頭がまた痛み出した。久しぶりに歩き疲れて、藤はそのままゆっくり眠りに落ちていった。

六本木、昨日見た夢が今日廃れていく街。人の希望と憂鬱がうごめく、眠らない街。

次の日も藤は接客の席にいた。店は開店から満席で、込み合っていた。乾杯の掛け声とともにグラスがぶつかる音、客の高らかな笑い声、女たちのはしゃぐ声、鳴り響く音楽。

藤の体調はさらに悪化していた。ざわざわとした店内の雑音で、頭がズキズキ痛んだ。藤は相変わらず気分をイラつかせていた。

藤は、スタッフルームに近い店の表側の席で、団体の客の相手をしてきた。皆スーツを着て、ネクタイをしつかり締めた格好で、40代くらいだろう。六本木でもこの店の客は、年齢層がたかい。40代はまだ若いほうだ。客はみな日頃のストレスから解放されて、顔を赤らめてはしゃいでいる。席についている同僚の女たちはつまらなそうな顔をして聞いていた。一番年齢が高そうな奥の席に座っている上司を中心に、会社の話で盛り上がっている。客たちだけで話が進んでいくので、女たちは口を挟まず聞いているだけだった。藤もつまらなくなつて、他の席を見渡していた。

そのとき、入り口から新しい客が入ってきた。

「いらつしゃいませ」

ボーイの掛け声が聞こえて、後ろを振り返ると、入ってきた男の姿に、藤は目を奪われた。

目深に帽子を被つて、インポートの大きな黒いサングラスをかけている。格好は白い薄手のカーデイガンに、細身のジーパンをはいたブーツインスタイル。背はそれほど高くはないが、体が華奢なせいか、実際よりスラッとしてみえる。ラフな格好の服が良く似合う。

しかしこのキャバクラに来るにはかなり若い格好だ。サングラスで顔は隠れているが、まだ少年ではないか思うくらいきれいな顔立ちをしている。その周囲を逸つした独特な華やかさで、男はかなり浮いていた。他の客も、誰もが一瞬彼のほうをちらっと見上げた。その男と一緒に入ってきた連れが数人いた。連れの人もスーツ

姿ではなかったが、30代後半から40歳くらいだった。

見ない顔だけど、・・・芸能人かな？ 店内の女の子たちは、みな客の話などそっこのけで、彼の方を見たり、ひそひそ話したりしていた。

男らは店のボーイに案内されて、奥の個室席に案内された。席まで進む間、男は皆の視線を感じたのか、うつすら笑みを浮かべて、うなずくような素振りを見せた。

案内し終えたボーイが戻ってきて、スタッフルームの前に立っていた別のボーイに話しかけた。

「今の客みた？あいつ桂セイジじゃね？」

「見た見た！芸能人ヅラしてチャホヤされてんだろ。くやしっすよね。」

そんなボーイたちの立ち話を途中まで聞いて、藤は自分のテーブルに意識を戻した。

相変わらずテーブルは、会社の話で盛り上がっている。女たちはそんな客に飽きたのか、さっきの男のはなしをしながら笑いあっていた。

「今の人かつこいいいよね。誰だか知ってる？」

「わかんない。いいな！私も奥の席いきたい。」

確かに雰囲気には目を引かれるものがあつたが、それも今の藤にはどうでもいいことだった。この辺りで遊んでいる芸能人などめずらしくない。人気をふかざし、金をばら撒いては満足に浸っている。

他の客とどう違うのだろうか。そんな人間など、世の中には吐いて捨てるほどいる。

気を紛らわせようと藤は、ショーウィンドウに目をやった。すると壁の隙間から、あの男が座っている席がちょうど見えている。気のせいかもしれないが、連れと談笑をしながらも、ちらちらとこちらを見ている。

奥の席は、個室とは名ばかりで、隣の席とつすい壁で仕切られているだけのスペースだ。テーブルを囲んで丸くソファアが並べられて

おり、入り口の方からみると、向かい側に座る席がちょうど2人分くらい見えてしまうようになっていた。藤のすわっている席はちょうどそこが見える位置にあった。

スタッフルームから蓮花が複数の同僚と共に出てきた。奥の席に呼ばれているのだろう。藤のいる裏を通り、奥のテーブルへ向かう。女たちが席にいくと、その男が軽く会釈をした。順番に中へ入り、藤からはよくみえないが、一番最後に入った蓮花が、あの男の隣に座ったようだった。

すると、男がサングラスを外した。藤はその素顔にはっとした。あの男だ。数日前、表参道の広告に大きく載っていた男本人だったのだ。顔は若かったが、さつきまでとはまた印象が違っている。次の瞬間、男はまたこちらを向いた。もう気のせいではなかった。男は明らかに、藤の方をみていた。藤は慌てて、視線を外した。

彼の目は、その若い雰囲気からは想像できないような鋭さを持ってキラキラとしていた。でも、どこか少し暗くて寂しいような。時に抱きしめたくなくなるような・・・そういう目。女がすぐ落ちてしまう目だ、と藤は思った。でも決して優しい目じゃない。

男は蓮花に紳士的に接しているようだった。彼の優しい口調が聞こえてくるようだった。20代後半くらいだろうと思えたが、その振舞いは、とても穏やかで落ち着いていた。片手でグラスを持ちながら、もう片方の手で、蓮花の髪を軽く撫でている。蓮花はうつとりとして、彼の方を見つめている。

彼の視線がまたこちらに向けられた。蓮花が男の肩に寄りかかるような姿勢になった。彼女の髪を指にからめて遊んでいながらも、男の視線は絶えずこちらに向けられている。そのようすからは何の恥らいも感じられず、あえてこちらに見せ付けるような素振りに、藤は内心釘付けになっていた。男は、髪の香りをかぐようにして、蓮花の頭に顔を近づけてゆく。上から振り注ぐ光が、男の表情を怪しく映し出し、そこだけ崇高な怪しい美しさを漂わせていた。藤はきれいだと感じた。そして男は一瞬だけ口元をニヤリとさせたかのよ

うに見えたが、すぐ元の表情に戻った。雑音が響く騒がしい店内で、いつの間にか2人の視線が交錯する。誰にも知られないうちに・・・

突然。太ももがヒヤツとして、藤は声をあげた。隣で酔っ払っていった客のグラスが、テーブルから落ち、ワインが、藤の膝に勢いよくかかったのだ。グラスはそのまま床に転がってしまった。ボーイが駆け寄ってきておしほりをもってきた。客は相当酔っ払っているのか、気づかず、大声で笑っている。慌ててドレスについた酒を拭いていると、店長が藤を呼びに来た。

「藤さん、ご指名です。」

奥村だった。藤は汚れたドレスを着替えるために、一旦メイクルームに戻った。着替えを済ませてスタツフルームに立ち寄ると、ボーイの竜がグラスを洗っていた。藤はその隣にあつた灰皿を持って、タバコに火をつけた。

竜は、ここのボーイの中で一番若く、藤と同年だった。時間が空いた時は、2人はよくここで世間話をした。竜はここへ来る前は大学生で、私立の名門校を卒業しているそうだ。藤は以前、せっかく大学出たのに、なんでこんなところで働いてるの？と聞いてみたことがあつた。昼間の仕事するより、こっちのほうが金がいいんすよと彼は答えた。

「ねえ竜ちゃん、奥の席に入ってる客みた？誰だか知ってる？」

「あのサングラスの人でしょ？あれセイジって人らしいよ。」

「セイジ？何してる人？」

「俺もよくわかんないけど、さっき店長に聞いたら、昔は売れてたロクミュージシャンだったらしいよ。今は作詞とかやってて、めつたに表にでないけどね。そっぴや俺、ガキの頃テレビで見たことあるかもしれない」

「え、あの人今いくつなの？」

「今年で39らしいよ！」

「マジで？28歳くらいかと思ってた。」
「見えないよなーあの見た目じゃ。悪い噂も耐えない人みたいだし、危ない感じがするから気をつけなよ。」
桂セイジは、元ミュージシャンで、今でも、新しいジャンルの先駆者として音楽界では有名ならしい。現在の作詞や作曲家としての活動も、ミュージシャン時代の功績があつてのものようだ。今はそれほど騒がれてないが、裏ではかなりの遊び人で金や女がらみの噂が絶えない人物らしい。彼の結婚相手との不仲説が騒がれた時代もあったが、今でも妻は健在。けれどその妻にもあまりよくない話が聞こえているようだった。

「藤、お客さん待たせてるんだから早く表でて。」
店長が呼びに来たので、私は気が進まないまま、奥村の元へ行つた。奥村との接客中、藤はろくな会話もしないまま、1人で酒を飲み続けていた。ワインとブランデーを明け、焼酎を5杯も飲んでもまだ物足りなかった。もう頭痛や体調のことは気にならなくなっていた。心配そうに途中で奥村が話しかけていたのが聞こえたが、何を言っているのか分からなかった。この日藤はセキを切つたように酒を飲み続けた。先ほどの男のことなど藤はもう忘れてしまつていた。浴びるように酒を飲み続けている藤を見ながら、他の同僚たちがこそそと話をしていた。

「最近藤さんの客、奥村さんばかりじゃない？」
「前はあの若い社長さんばかり来てたけど、最近みないよね。今度はその人にも乗り換えたのかな？」

「あの人お客さんと相当やつてるらしいじゃん。」
「ねー。指名入る度に人変つてるし。」
藤のことを良く思っていない同僚達がいることを彼女は分かつていた。それでも別に構わないと思つていた。客と寝ているというのは本当のことだ。そうしなくてはいられない藤の寂しさなど、他人には理解できるはずもなかった。世の中には、孤独に耐えられない人

間もいる。そのことを誰もが共有できるわけではなかった。自分は弱い人間だ

嫉妬や妬みなど、どこにでも転がっている。ただ藤はできるだけ、そういったものの外に自分の身を置きたかった。しかし、この世界にいる限り、そういったことから永遠に逃れられないことも分かっていた。藤はもうこの仕事をやめようかとも考えていた。まだ若い藤には、あえてこの仕事に固執する必要などなかった。ただ仕事をやめたら自分にはどこにも行き場所がなくなってしまう。この孤独を抱えたまま新しい世界に踏み出すことなど藤には難しかった。こうして今の現状で踏みとどまることが、今の藤には精一杯だったのだ。

午前2時、店は閉店した。酔いつぶれて倒れこんでいる藤を、竜が介抱していた。上着を肩にかけてやると、腕を肩に回して背負いあげた。店の裏に、送りの車が待たせてある。

「送り来てるけど、家までつける？俺と一緒に乗っていいこうか？」
「いい、一人で帰れるから」

藤がそういうので、竜はしぶしぶ承諾して、車に藤を押し込んだ。

「おいおい、相当寄ってるけど、大丈夫かい？」

「大丈夫です。この人吐きませんから」

竜は、そう運転手に告げて、ドアを閉めた。走り去っていく車を、竜はいつまでも見送っていた。

割れそうな頭の痛みに、藤は目を開けた。外をみると、新宿と代々木の間あたりを走っていた。ここまでくれば家まであと10分くらいだろうか。辺りを走る車はいない。猛烈な吐き気がして、藤は車を止めた。ドアが開くと藤は、素早く外に出た。吐き気はするものの、なかなか吐けない。運転手が心配そうにこちらを見つめている。「もう歩いて帰れますから、大丈夫です。」

運転手が何か言おうとしたが、強引にドアを閉めてしまった。そのまま道路を渡った。

外は、空気がだいぶ冷たくなった。夜風に当たっていると肌寒い。もうすぐ夏も終りだ。

藤は、なんとか歩いてはいるものの、意識は朦朧として今にも道路に座り込んでしまいそうだった。頭がズキズキ痛む。藤は近くにあったホテルの入り口あたりで、すこし休もうと思いい、そばの植え込みがあるコンクリートの壁に寄りかかった。

向かい側の少し離れたところに、シルバーのみたこともない外車が、こちらを向いて止まっている。ホテルから一人の男が出てきて、その車へ歩いていき、そのまま運転席に乗り込んだ。男が顔をあげると、その男は先ほど店に来ていたあの桂セイジだった。

藤が気づいた時には、男もしきりに目を凝らしてこちらを見ているようだった。エンジンが掛けられた。白いライトがまぶしくこちらを照らした。藤は何も見えなくなった。

時々、祖母は祖父に愛されていないのではないかと感じる時があった。祖父は寡黙な性格で、私や弟の教育にあまり口を挟まないばかりか、祖母の存在にさえ、無関心のように思えた。夫を愛し、息子や家を守り、死ぬ間際まで夫をしたって働いていた。祖父は祖母を本当に愛していたのだろうか？
祖母もまた、孤独な人間だったのかもしれない。

ベッドの中で目を覚ました藤の前に広がるのは、四角い天窓から覗く暗い空。悲しくなるくらいの灰色の空。ここは、どこなのだろう。薄暗い天井、いくつも吊り下げられた振り子のオブジェ。規則正しく揺れては、雫の落ちるような金属音を響かせている。きれいに並べられたアンティークの家具。藤が寝ているベッドの回りは、木彫りの模様が入った高い柱が囲っており、その周りを包み込むように

白いベールが垂れ下がっている。そのベールをめくると、花瓶にたくさん挿された深紅のバラの向こうには、豪華なガラスのシャンデリア。床に広がった柄のカーペットの上には、赤いヒールが転がって、鮮やかだ。そこはまるで外界とは別世界のようだった。……

ただど、温もりの感じられない部屋。どこかで携帯の着信音があった。振り返ると、携帯はすぐそばの机においてある。

「はい、もしもし」

「あ、もしもし？」

少し枯れた若い男の声がする。

「君、まだ俺の部屋にいる？」

「え？ここですか？」

「そう。君昨日、ていうか今日の明け方だけど、ホテルの前で倒れたんだよ。覚えてる？」

「……」

そう言われて、藤はやっと今朝のことを思い出した。家まで帰る途中、藤は車に乗り込む桂セイジを見た。そしてそのあとは……？この電話は、桂セイジ本人からなのか？藤は恥ずかしくなって、申し訳なさそうに黙りこんだ。男はおかしそうに笑っている。

「びっくりしたよ、突然倒れちゃうんだもん。俺ひいちゃったかと思っただもん。女の子1人だったから、危ないと思って。」

「そうだったんですか。ありがとうございます。」

「いやいや、全然いいですよ。本当は目が覚めるまで一緒にいてあげたかったんだけど、仕事だったから先出てきちゃった。」

男はまだ面白そうに笑っている。でもとても感じのいい話し方だ。

「声が元気そうで安心した。今日仕事は？」

「これからあります。」

「そう、じゃあ部屋は管理人に閉めさせるから、鍵は持っていいから。また返しにきてね。」

桂はそれだけいうと、電話を切ってしまった。戸惑いながらも、藤

は携帯を切った。

どうやら藤は、明け方倒れてから、車で桂セイジのマンションに運ばれたらしい。藤はまさか自分が彼に助けられるとは思ってもみなかった。ここはセイジの自宅だろうか？だとしたら、妻がいるはずだが、部屋には自分しかいない。玄関の方にも人がいる気配はしない。生活の匂いなどまったくしない部屋。この部屋の入り口の横にあるキッチンには、人が触った形跡は何もなく、小さな冷蔵庫がおいである、時計を見ると、すでに夕方5時近かった。6時までに出勤なので、家に戻っている時間はなさそうだ。藤は急いで部屋を出た。エントランスを出ると、ツタの葉や植物が生い茂った狭いせまい通路を通る。一見すると、古いレンガのヨーロッパ風の建物。都会にすることを忘れてしまいそうな場所。外に出ると、そこは代官山の高級住宅地だった。閑静な住宅地を抜けると、広い道路に出た。藤はそこでタクシーを拾い、店へ急いだ。

セイジは車を渋谷方面へ走らせていた。打ち合わせが思ったよりも長引いてしまった。彼には気がかりなことがあった。午前中から最近彼が提供した楽曲の打ち合わせがあり、事務所にもりつきりだった。夕方からは撮影と雑誌の取材が何本かはいつており、スケジュールは夜まで多忙を極めていた。しかし彼は夕方の予定をすべてキャンセルして、急遽自宅へと向かっていた。嫌な予感がした。

車はまもなく住宅街の細い道へ入っていた。その中にある渋谷を一望できる高層マンションが彼の自宅である。車を止めると、彼は最上階にある部屋へと急いだ。

ドアを開けて、名前を呼んでみるが反応がない。中にはいると、部屋は洋服や物が散乱していた。カーテンがズタズタに引き裂かれている。誰もいない部屋を通り、奥のバスルームへと向かった。扉は半分開かれたままだ。中からは暖かい湯気が立ち上っている。扉をあけると、目に飛び込んできたのは、身の毛もよだつような凄惨な光景だった。水が流れる音、壁に無数に飛び散った血痕があり、血

で染まった真つ赤なバスタブは血の海のように溢れては流れだす・
・そしてそこにしがみつくように、生気を失って横たわっている妻の姿があった。彼女の細く白い手首には、ナイフで切り刻んだ跡。傷跡は両腕にまで残っていた。セイジは、両手で顔を覆ったまま、その場で静かに立ち尽くしていた。

午前1時、六本木の夜は、今日もおびただしいネオンの光とともに更けてゆく。それでも季節の変わり目は、この夜の街にも着実に訪れようとしていた。

藤は客と話し込んでいる。昨日セイジが座っていた場所は別の人が座っている。先ほどの電話の声は、最初に藤が受けたうけた印象とは違っていた。優しさを装ってはいるが、その下に決して表に出さない冷たさを隠した目が、まだ強く印象に残っていた。偶然そこに居合わせた店の女を、親切で助けたりするような男には見えなかった。誰か人を呼ぶこともできたはずだ。昨日、ここで交わした愛撫するような視線と、明け方の出来事。偶然が重なっただけだと藤は思った。

まだもっているあの部屋の鍵……。

“また返しにきてね”

その言葉が意味していることぐらい、藤は分かっていた。

……いつ？

そのとき私は、あの人に抱かれるのだろうか？藤はあの部屋を思い出している、少し胸が苦しくなるような気がした。もしこれから、私があの人に抱かれるようなことになっても、2人はただそれきりの関係だろう。それならそれで構わない。もとミュージシャンにとつてキャバクラ嬢を口説くことなど造作もないことだろう。世間ではよく聞く話だ。

閉店後、また携帯の着信音があった。藤は少し興奮して電話に出る。耳をすますと、またあの枯れた声があった。

「……」

「今からいくから。」

まだ夜も明けきらぬ夜の街に、藤は駆け出した。

あの頃、いつか見た暗い空は、1人で背負うには重すぎたけど。今でも目を閉じれば、いつでも思い浮かぶの。あの部屋は、あなたそのもの……。そのころ私が手にしていたものは、砂のようにこぼれて落ちてるゆくものばかりで。孤独の果てに、揺るがない確かなものを探した。その果てに辿りついたのは、あなたの部屋。そこにある灰色の空を、あなたは私に与えてくれた。私はあなたの中にいて、今度は一緒に、その空を見上げることができる。

刑務所の外は、雪が降っている。東京に今年振る雪は今日で3度目だ。前の晩は道理で寒さが厳しかった。入り口の小さな窓から、護衛がこちらを覗いた。施錠を解く音がして、ドアが開いた。

「娘さんからの手紙だ。」

「ありがとうございます。」

封筒を受け取り、宛名を見ると綺麗な字で書かれていた。弟が書いたものだろう。差出人は娘の名前になっている。中を開けると、折りたたんだ一枚の画用紙がでてきた。広げると、紙いっぱい書かれた顔の絵だった。顔の輪郭は黄色で、まん丸とした黒い目、口と頬はピンク、耳は茶色で、顔の真ん中に小さく書いてある鼻は、なぜが青色。思わず私は小さく笑った。上のほうには水色の雲が書かれていて、太陽の光をたくさん浴びながら、その顔は笑っている。いつの間にかこんな絵もかけるようになったのだ。私は嬉しさでいっぱいになって、早くそばにいつて抱きしめてやりたいと思った。しんと降り積もってゆく雪は、美しかった。その一つ一つが、舞い降りてくる小さな幸せのように輝いて見えた。雪は誰の元にも降り注ぐ。そして何もかもを白く覆ってみえなくしてしまう。あなたの元へも、この雪は降っているのだろうか。

藤のもとに、見覚えのあるシルバーの車が近づいていた。中から男が窓を空けて顔をだした。

「乗って。」

セイジに促されて藤は助手席に座った。車は代官山へ向けて走り出した。

セイジは黒いハットを被り、Ｔシャツに薄い茶色のサングラスをかけている。昨日店に来たときには、隠れていて気づかなかったが、右腕には波のようなモチーフのタトゥーを手首まで入れている。ところどころに桜吹きも入っている。ハンドルをきるセイジのすがたは近寄りがたい雰囲気だった。

ハンドルを握る手は、色が白い。綺麗な指だ、と藤は思った。ゴシツクのシルバーの指輪をいくつもはめていた。

幼い頃、保育園に迎えにきていた、若くてキレイな母親の手を羨ましいと思っていた。ほのかな化粧品のいい匂いをさせて迎えるくる母親の、あんな白くてやわらかい手に触れたいと何度もおもった。母を知らない私は、若い女性を探しては、自分の母親を想像した。

セイジの髪はかすかに茶色く染まってさらさらとしている。長さは、長くて肩に付くくらい。横顔は鍵鼻で唇はうすく整っている。幼い顔つき、一見すると若い青年のように見える。しかし車内が暗いせいか、威圧感があって大人っぽい。

藤が話しかけずらそうにしていると、セイジが口を開いた。

「初めてじゃないけど、初めまして。」

セイジは控えめににやっと笑った。藤は苦笑した。

「君、俺のこと誰だかわかってたりする？」

「桂セイジさんですよ。名前だけは伺ってました。昔ミュージシャンだったんですよ。」

藤は、言っではまずかったかなと思い、口をつぐんだ。セイジはそ

れを察してか、気さくに笑って返す。

「いいよそんな気使わなくて。もう歌ってないんだし。まあね、誰でも知ってたわけじゃなかったけど、当時は結構売れてたよ。君みたいな若いコはあんまり俺のこと知らないでしょ。」

少し自慢げにはなすとところが可愛いなと思った。ぶっきらぼうだが正直で、案外話しやすいんだな、と感じた。

「体調は大丈夫？」

「はい、大丈夫です。昨日はありがとうございました。」

「別に構わないよ。仕事忙しいの？」

「そうですね、最近はずいぶん忙しかったです。」

「そう。君、名前は？」

「山白藤です。」

「藤っていうんだ？変った名前だね。俺昨日君の店に行っただけど、覚えてる？」

「はい」

車内は少し沈黙した。

「そんなに緊張しないですよ。あ、昨日は何もしてないからね俺。」

セイジは少し苦笑した。藤も笑った。

「あの店、内装がおしゃれでいいよね。気に入ったよ。」

「そうですね？よかったです。」

「うん、狭いけど、隠れ家っぽくて好きだね。」

セイジは枯れた声で、穏やかに話してはいるが、どこかいつも暗くて貫禄があつた。そのあと車内はしばらく沈黙した。

車は寝静まつた静かな代官山に到着した。2人はツタの葉が生い茂った細い通路をいった。

振り子はまだ、規則正しい音色を奏でている。白い壁に覆われた部屋の入り口は、青で刺繍のように縁取られたアーチ型をしている。それをくぐると、部屋の奥には大きな窓が広がっている。窓は、夜の暗闇で何も見えなかった。

ベッドの向かい側、ゴシック風の彫刻がほどこされた黒い石の棚に、たくさんの蝋燭が並べてある。セイジはその1つ1つに明かりを灯していった。昼間はただ薄暗かった部屋はあたたかな光に包まれてゆく。キャンドルから立ち込めるいい香りとともに、静かな時間が流れてゆく。セイジは何も言わず、ゆっくりと白いベールをめくると、藤を優しくベッドに寝かせた。

セイジは大きな窓を開けた。カーテンの裾に座り込むと、外を眺めながら、たばこに火をつけた。藤は体を横にして、彼をじっとみている。

「この部屋は、昔から俺が歌を作るための仕事部屋で。まあ、普段は事務所かスタジオにばかりいるから、あんま使ってないけど。」そういつて気だるく煙を吐き出す。暗い夜空を背にして、白い煙が顔の前に立ち上る。この人は、なんでタバコを吸うだけでこんなにかっこいいのだろう。街角の大きな広告の写真でこの人を見たときも、彼はタバコを吸っていた。この人は暗がりが似合う人。

「ここ気に入ってくれた？」

藤は少し笑みを浮かべて頷いた。彼は満足そうにこちらを見て、いじわるそうに、にやっとした。その目はまだガラガラとした光を浮かべている。最初に藤が見たのは冷たい目。だけど今日は、なぜか悲しい目をしている。

煙は、その裏の夜空に吸い込まれて消えた。窓から入ってくる風が、もう秋の匂いを漂わせていて、切なかった。

「・・・ずいぶん涼しくなったな。」

アンティークのベッドはギシギシと音を立てて揺れた。その度に、気の遠くなるような快感の波が藤の体を走った。

「あ・・・ああ・・・」

声と共に、セイジの呼吸も荒くなる。セイジの熱い息が顔のそばで感じられる。うっすら汗がにじむ。細くて熱い彼の腕が、藤の体を抑えつけている。セイジの視線はじっと藤の目をみつめている。

「昨日、わざとあの席に座ったんだよ。あそこに入った時から・・・俺、見てないようで見てるから」

むらむらとした感情がこみ上げてくる。セイジが耳もとで囁くのを、藤は快樂の途中で聞いていた。彼女は抱かれている間、セイジの目の中にいた。そのギリギリとした中にいつまでも抱きしめられていたいとおもった。

「きれいだよ、藤。」

服を脱いだ彼の裸にあったのは、蝶のマーク。彼の痩せた胸に浮かんだ、可憐な蝶が、暗闇の中をゆらゆらと飛んでいた。

ああ、この人はまだ昔の自分を忘れていない。今でもこの人の目は、その中に野心と欲望が渦巻いている。私は昔のあなたを知らなかったけれど、それは感じ取ることができた。今枯れてもなお、それが私やあなたの周りの人間たちを惹きつけて離さない。けど、
・あなたのもっと奥深くに、誰にも手の届かない“孤独”がある
ということを、私は見逃さなかった。私はどうしても、そんなあなたと父の姿を重ね合わせてしまうの。今すぐ抱きしめてやりたくなくなるくらい、胸が熱くなるの。泣き出しそうになるくらい・・・。

その日はひさしぶりに夏日になった。照りつける太陽がコンクリートを熱してジリジリと熱気を伝えている。汗を拭きながら携帯で話すサラリーマン。買い物した紙袋を肩から下げた若い女が前をゆく通りすがった男の集団が振り返っている。通行人の真ん中にたつてティッシュを配る男。狭い道なりに携帯ショップや雑貨屋がひしめき合っている。狭いガードレールの道をたくさんの人が通ってゆく。見慣れた都会の風景。

セイジは病室の窓からそれを見下ろした。病院は繁華街から少し離れたところにあった。高層ビルの間にある路地裏のジメジメとした人気のない場所に、その病院はひっそりとたたずんでいる。

病院の殺風景な白い部屋が、セイジは苦手だった。ツンとする薬品の匂いが鼻をついた。

後ろには妻が眠っている。その寝顔は血の気が全くなく、疲れた顔をしていた。妻の細い腕に巻かれた包帯が痛々しい。彼女の痩せた頬を指でなぞってゆく。ベットの隣にある椅子に腰掛けると、セイジは彼女の手を握った。

「奥さんは、これが初めてではないですね。」

無精ひげを生やした医者は、腕を捲り上げながらいった。

「はい。」

「何かあつたんですか奥さんと？」

「先生。」

看護婦がカルテを持って、何やらそつと耳打ちした。医者は深刻そうな顔をして黙り込んだ。

「早くやめさせないと、手遅れになりますよ。次からはウチでは・・
もう通報しなくてはなりません」

医者がそういうと、セイジは頭を下げた。

セイジは昨日のあの凄惨なバスルームの光景を思い起こしていた。彼女のあの生々しい腕の傷跡と、あの血があふれかえって様なバス・タブの残像がまだ残っていた。妻の手を握り締めた。

妻の心と体は、長年の覚せい剤の使用でボロボロになっていた。セイジの妻が、病院に運ばれることは今までにも何度もあった。ここ何年かで、彼女の精神状態はさらに悪化していた。それは日常生活にまで支障をきたすようになった。常にうつ状態と異常な興奮状態を交互に繰り返していた。呂律が回らないせいで、今ではセイジとまともに会話することさえできないほどになった。セイジの苦悩は続いていた。そしてこのとき彼もまた、正常な精神状態ではいられなくなっていた。

病院を出たセイジは、恵比寿にあるスタジオへ向かった。これから撮影や歌手とのレコーディングの作業が待っていた。その日仕事は深夜まで続いた。

六本木交差点は渋滞している。人が入る隙間もないくらい車がひしめき合っている。クラクションを鳴らす音がどこかで聞こえる。高速道路の下を行き交う人々の足音が

それをかき消した。ここは相変わらず騒がしい。

メイクルームで着替えをすませた藤は、ソファアに座って、携帯をいじっていた。奥村にメールを送ってみるが、返信がない。仕事が忙しいのだろうか。他の客にも連絡してみたが、電話はつながらないままだった。開店時間はあと5分に迫っている。藤は奥村と出会う前まで、よく足を運んでいた本間にメールを送ってみた。

あれから数日たったあとも、藤は自分からセイジに連絡することはなかった。仕事柄もある、妻がいることも知っていたが、そうではない。連絡したら、自分と会っている時とは違うセイジを垣間見してしまうような気がして怖かった。彼の何がそう思わせるのか藤にはわからなかったが、それくらい藤にとって彼は、特別な存在になりつつあった。

ソファアに蓮花がやってきた。

「おはよう。」

「おはよう。」

「こないだ来た桂セイジさんが、来週あたりご飯食べに連れてってくれるって言うんだけど、藤来週空いてない？」

そこに最近新しく入ってきたばかりの由香里が、興奮して口を挟んだ。

「うっそーいいな蓮花さん！うらやましい！」

由香里は悪いコではないが、何にでも首を突っ込みたがる性格と、甲高い声がどうも藤はなじめないでいた。彼女はこの間蓮花と一緒にセイジのテーブルについていたのだ。

「じゃあ由香里ちゃん一緒に言っただけで。私来週は空いてないんだ。」

藤が優しくいうと、由香里は素直に喜んだ。蓮花は藤に気を使っている様子だった。

店が開店しても、1、2時間は誰も客が来なかった。待合室で女たちは世間話に花をさかせている。

藤は携帯をみた。メールが一件入っていた。開くと、先程連絡した本間からだった。仕事が終わる次第、0時頃こちらに来るという。

藤はメールを返すと、蓮花を見た。蓮花はあの日からセイジと連絡を取り合っていたのだ。知らなかった。けれど、セイジはキャバクラで相当遊びなれている様子だったので、ありえないことではないなと思っていた。むしろそんなことで、蓮花と探りあいをして、彼女との仲を壊したくはなかった。蓮花の話しぶりからすると、藤とセイジがすでに関係していることなど、知らないのだろう。セイジが今後彼女に告げ口するとも思えなかった。セイジの話題はこのまま口に出すことはないだろう。藤はそのまま客が訪れるのを待った。深夜0時前、予定より早く藤の客は到着した。

「いや、ここへ来るのは久しぶりだな。」

「そうですね。もう来ないかと思ってた。」

「ごめんごめん。仕事が忙しくてね。」

本間は申し訳なさそうにいった。彼は20代後半だが起業して、もう4年くらい経つのだそうだ。まだまだ会社は小さいが、経営は軌道にのっているらしかった。本間は年の近い藤に好意を持っているようだった。純粹で、爽やかな好青年だ。

「藤ちゃんはいつ頃結婚したいとかあるんですか？」

「ん、どうかな。まだ全然考えてないですね。」

「僕は早く結婚して、子供欲しいんだよね。うちは兄弟男ばかりだったから女の子がほしいな」

本間は楽しそうに自分の将来の理想を延々と語っている。藤は丁寧に相槌をうちながら聞いていた。

「いらしゃいませ。」

ボーイの声が聞こえた。店は今が混みどきである。11時過ぎあた

りから客が一気に増え始める。

ふと見ると、それはセイジだった。グレーのネルシャツにサングラス、カーキのカーゴパンツと黒いブーツを履いている。無造作にスタイリングした髪は、本間とは対照的だった。ネックレスやブレスレットをジャラジャラとつけた風貌が目飛び込んでいる。セイジは、藤が接客するテーブルの前を通りすぎると、テーブルを2つ挟んで、藤とは逆を向いて座った。

セイジに指名されたのは蓮花だった。蓮花はセイジの隣に座ると、親しそくに手をセイジの肩に置いている。セイジはすぐに手を彼女の腰に回して、体をひき寄せた。

「来てくれたんですね。嬉しい・・・」

セイジは優しく微笑んだ。ささやくように話し出す。

「何飲もうか？」

笑いあう二人の話し声。近くにいる藤にはどうしても聞こえてしまふ。

藤は一瞬、冷静さを失った。セイジの声が聞こえてくる度、藤ははがゆかった。しかし、どんなに二人の仲が縮まるうとも、自分にはセイジの部屋で過ごしたあの一夜がある。それはある意味、藤の中で自信のようなものを呼び起こさせた。

藤は次の瞬間、どこかで蓮花を見下している自分を、打ち消した。私らしくない。セイジが遊び人で有名なことは、以前から知っていた。その上で抱かれたのだ。あの日藤を突き動かしていたのは、あの男に対する好奇心。ただそれだけの感情だった。藤にとってセックスは、孤独を埋め合わせるだけの行為にすぎなかった。彼にとっても藤はただ自分に寄ってきた女の一人だ。藤はそれで満足だともっていたはずだ。

そう思い直すと、藤はいつもの冷静な自分を取り戻した。そしてそのまま本間との会話を続けた。本間は、そんな藤の変化に気づいたのか、少し怪訝そうな顔をした。

「藤ちゃん、どうしたの？気分でも悪くなった？」

「いえ、別に。」

「それならいいんだけど。」

そういうと、本間は再び機嫌良さそうに笑った。藤も笑っていた。本間と藤は閉店時間を過ぎても会話を続けていた。店長が声をかけにきたので、本間は、すいません、と一言謝り、席をたった。

「また会いにくるよ。」

本間はそういつて店を後にした。藤は本間を出口まで送り、最後まで見届けた。手を振っているうちに、藤はセイジのことが気にならなくなっていくような気がした。もうこのまま忘れてしまおうと、藤は思った。

メイクルームは異様な熱気に包まれていた。みんな今日セイジが蓮花の客としてきたことを知っていたのだ。由香里がまた興奮して言った。

「蓮花さん、凄いですよ！芸能人をお客さんにできるなんて」

「そうでもないよ、ここらへんで遊んでる人なんかいっぱいいるし。」

蓮花が謙遜していった。由香里の言うことに他の女たちも続いた。

「あのマジでかつこいいいよね。おしゃれだし！」

「だってあの元歌手だってよ。それにしても39歳には見えないよね！」

「でもあの人がって相当遊んでるんでしょ。なんか透かしてて怖いし。」

「確かに。俺は芸能人ですって感じだよね。」

「えーそれがいいんだよ。」

みんなしきりに蓮花をうらやましがった。蓮花は、ただ黙って聞いている。

鏡の前で化粧を直していた二人組みが、話をしていた。

「あの芸能人だからって、超態度でかかない？」

「確かに。態度悪いよね。それに何考えてるかわかんないし。うざい。」

「そういえば昔、あの人薬やつてる噂あったらしいよ?」

「知ってるそれ。私は奥さんもやつてるって聞いたよ。結構ヤバイ人なんでしょ?」

「金にも超汚いらしいしね。」

私は蓮花がその二人を睨み付けているのに気づいた。蓮花はセイジを客としては見ていない気がした。彼女はセイジを本気で好きになっっているかもしれないと思った。

藤は着替えを済ませて外に出た。送りの車がすでに何台も止まっている。ドアを閉めると、車はすぐに発車した。すると、待ち構えていたように、携帯がなった。藤は電話にでた。

「俺。今から来れない?」

聞きなれた声。決まりきったような台詞だった。藤は冷静に返した。
「もう私、会う気はないです。連絡もしないと思います」

ここでまたセイジと会えば、蓮花を裏切ることになる。連絡を取り合っていれば、蓮花を見るのが辛くなる。

「待つてるから」

電話は切られた。藤はじつと車の外を眺めていた。

・・・

黙ってこちらを見ていた運転手が、口を開いた。

「お客さんですか?」

「はい。」

「会わなくていいんですか?」

「はい。」

「嘘でしょう。あなたさっきとまるで顔が違うよ。」
運転手は笑った。

「・・・もうずいぶん夜は寒くなってきましたね。」

「・・・。」

車は、表参道を通りかかった。夜の明治通りは車もなくガランとしている。誰もいない夜の並木道を、車は通り過ぎてゆく。車はそ

のまま、明治通りを大きく左に曲がった。

・・・。

「代官山へ向かって下さい。」
運転手は頷いた。

静かな代官山。見慣れたツタの葉が、風にゆれてさらさらと音を立てている。藤は闇の中の狭い通路を行く。見上げると、わずかな茂みの間から、2階の明かりが見えた。

エントランスに入ると、セイジはそこに立っていた。

セイジは藤を見ても何も言わなかった。彼女が来ることを当然のようになり、黙ってむかいいれた。藤は無言で、ただ迎えられるままに部屋へと入っていった。

藤が蝶を見るのは、今日で2度目。沈黙と灰色の空がある部屋。

私はなぜかまたここにいる。ベットは暖かすぎて、現実を忘れそうになるくらい心地いい。私の孤独を一瞬でも慰めてくれる場所。

蠟燭の明かりだけが灯る、薄暗い天井。この部屋はいつ来ても静寂が支配している。

セイジの美しい指が、藤の柔らかい髪を掻き毟る。首筋から下に向かってセイジの薄い唇がゆっくりと宛がわれてゆく。肌を這う感觸は、忘れたいと願う藤の心を揺るがす。

深い緑色の柄のカーペットには、脱ぎ捨てた赤いヒールが転がっている。カーペットの色に、赤が鮮やかに映える。初めて来た時と一緒だ、と思った。セイジの視線を感じながら、藤はそれを眺めた。

「ああん。」

セイジの手は熱く、足首から太ももに掛けて足の後ろを優しくなでる。彼がそつと指先に力を込めると、細い腕の筋肉の筋が浮き出る。薄い唇を嘗め回す、セイジの舌に魅了されてゆく。愛撫をうけながら、藤は深い快感の中に埋もれる……。彼女は、こうしてセイジ

に抱かれている自分の姿を想像しては濡れた。友人を裏切つてまで、ここに来てしまっているのが、それまでの自分からは考えられなかった。それほどまでに自分はこの男に溺れているのだと、藤は初めて認識した。

ベットに横になりながら、気だるくタバコの煙を吐き出すセイジの横顔を見ていた。蝋燭の光が、セイジの痩せた肋骨を浮き立たせている。振り子の金属音だけが、規則正しく聞こえている。

今日セイジが店に訪れたことを藤は知らないふりをしていた。そんなことは今更口にしても仕方ない。タバコを吸い終わると、2人は長いキスをした。タバコの匂いが舌の上で混ざり合う。キスが終ると、セイジは顔を近づけたまま、いつものようにいじわるそうにニヤツと笑った。

「わざとだよ、今日。」

セイジが切り出した。

「俺があんな女としゃべってるのはどうだった？」
軽く微笑みながら、じっとこちらを窺っている。藤は不機嫌そうにうつむいた。

セイジは全く悪びれる様子もなく、穏やかに続けた

「あのコ・・・蓮花ちゃんだっけ？いい子だよね。初めて店行った日のエッチもよかったけど」

その瞬間、藤は驚いてセイジを見返した。

「あれ？言っただけだったっけ？」

セイジはわざとらしく言った。

「は？どうということ？」

「どうということって、そのまんまだよ。」

セイジは苦笑した。

あの時、酔いつぶれて意識が朦朧としていた。藤がセイジと出会ったのは、新宿のホテルの前・・・そしてセイジはそのホテルから出てきた。それまでセイジがいたあのホテルの部屋には、蓮花が寝ていたのだった。

藤は頭が真っ白になった。怒りがみるみるうちに目に浮かんだ。それは今まで藤が経験したことのない感情だった。

嫉妬？

藤の脳裏にその文字が浮かんだ。これまで、藤にとってそれは祖母を表す言葉でしかなかった。

祖母は本当は・・・私の母親に嫉妬していたのではないだろうか？

彼女は母を恨んでいた。父がおかしくなったのは、母のせいだと言っていた。“あの女のようににはなるな”その言葉がいつまでも藤の耳から離れなかった。

祖母の一生は、自分の道を選択することなど出来ない時代に生まれて、人生のそのほとんども、家のために働いて過ごしてきた。だから家を大きくし、守ることを、誇りのように感じていたのかもしれない。私が早く金持ちと結婚して、家庭を築くことをなによりのぞんでいた。私は祖母の考え方を批判し、反抗した。けれど、本当は彼女も、もっと自由に生きる道を望んでいたのではないか？だから父や自分を置き去りにして出て行った母を、祖母は憎んだのではないか？

自分が、祖母と同じ人間だと思ったことなどない。むしろ、私は母親に似ているのだと思って、嬉しかった。藤はいつも、自分の母親を、何にも捕らわれない崇高な存在と崇めていた。自分が祖母と同じ、下らない嫉妬で固められた人間であることなど、信じたくなかった。

しかし今、藤の中にあるのは無様な嫉妬。あの夜出会った時のセイジが、既に、蓮花との関係を終えた後であった事実、藤は耐えられなかった。

表参道の交差点で初めてセイジを見た時から、暗がり立つその姿に捕らわれていた。倒れているのを助けられた時から、どこかで自分は過信していたのだ。自分はセイジにとって特別な存在なのでは

ないかと。ベットから見上げた灰色の空と、セイジがくれた安らかな時間は、すべて、もしかしたら自分だけのものではないかと思っていた。あの日この部屋で目覚めた瞬間から……。そんな小さな藤の期待が、脆く崩れ落ちていった。醜い自分と祖母の記憶が重なり合う。

「どうしたの？君らしくないね。言ったらまずかった？」

彼はまだ笑っている。ずるい人。わざと教えたくせに……セイジの目はまたギラギラと輝いている。

「今日は本当に君を見に行ったんだよ。会いたくて。彼はやっと、真剣な顔つきでいった。」

「包み隠さず言うのは、ありのままの俺に惚れさせるため……」セイジはまたいじわるそうにニヤつとした。……藤は、初めて男の前で泣いた。藤はこんなことで泣いている自分が腹立たしかった。「あれ、泣かしちゃったかな？」

優しい微笑みを浮かべるセイジの顔がそこにあった。優しい中に、少しだけ孤独を隠したようなこの人の微笑み……。この男はわざとこうして弄んでいるのだ。それも堂々と。憎たらしいと思った。そう思うけれども、なぜか許してしまいたくなる。セイジの顔を見ていると、もう自分の感情などいつのまにか、どうでもよくなってしまっている。

「どうしてそんなふうに笑えるの？」

セイジは、考える間もなく答えた。

「それは、優しくないから。」

すべてはあなたの気の向くままに。私はただあなたに愛されるようにするだけ。この人は蝶だ。喜びを奪っては与え、また与えではまた奪う……。そうやってすぐどこかへ飛んでいってしまうのだろう。自由に暗闇を飛び回る美しい蝶。この世のどんな存在も、

この人を捕まえることはできないのだろう。私はただ隣にいてあなたが見せてくれる夢を見てみたいだけ。あなたが他にどれだけの数の女を抱いているのだとしても、私が輝き続ける限り、あなたは必ず、私の元へ戻ってきてくれる。

夜明けの空。地平線は赤色に染まり、夜の藍色と溶け合っている。光と闇が接するところには、鮮やかなコバルトブルーの帯が平行に続いている。その手前には街の電線が張り巡らされた鉄塔が、遠くまでいくも連なっている。窓から差し込む光が暖かい。外の雪はもうほとんど溶けてなくなった。私は朝早く起きると、刑務所での作業が始まる前に、娘に手紙を書いている。

娘は今頃まだ眠っている頃だろうか。幼稚園にはきちんと通えているだろうか。寒くて風邪をひいてはいないだろうか。私は、芳樹がこの手紙を読むのを、嬉しそうに聞いている妙の姿を思い浮かべながら、手紙を書き終えた。

あの頃、私にもこんな心の平穏が訪れることを、どうして予想できなかったろう？それは全部妙が私に与えてくれたもの。ねえ、あなた。

セイジは、事務所と恵比寿のスタジオとを行き来する生活を送っていた。昨日は明け方までレコーディング作業が続き、睡眠時間はこの1週間、ほとんどないに等しかった。

仕事に追われる中、セイジの心に暗い影を落としていたのは妻咲子のことだった。彼女はまだ肉体的にも回復していず入院していた。セイジは仕事の合間を縫っては、都会の隅にある、あの古い病院へ足を運んだ。

咲子の薬物依存は、かなり進行していた。彼女は普段眠らず食事もせず、部屋の中を歩き回ってはセイジを探していた。自宅の部屋はいつも荒れていた。

・・・いつしかセイジは、人目を避けて咲子を自宅に閉じ込めて置

くようになつた。誰にも相談できずに、セイジにはそれしか方法が思いつかなかつた。そしてセイジは妻から遠ざかるように、外での仕事に明け暮れた。特にここ何年か、もう自宅にはほとんど帰らない日々が続いていた。

セイジは表舞台を去つた時、今の事務所を立ち上げた。売れていた当時、彼は美的感覚とそのカリスマ性から、業界内では注目される存在だつた。その独特なリズムと官能的な詩のスタイルで、新しいジャンルを築いたことで知られていた。

作詞や作曲家としての活動を始める際、大手のレコード会社は彼を自分たちの懐に彼を取り込みたがつた。次々といい条件の話が舞い込んできた。しかしセイジは誰かの傘下に入つて音楽を作るつもりはさらさらなかつた。自分の作品が別の誰かに歪められてしまうのが、我慢できなかつたのだ。

自分の美しいと思える音楽だけを追い求めていたい。それが彼のミュージシャンとしてのあり方だつた。しかしそのために、大物といわれる一部の業界人達たちからは疎外視されていった。

まだ事務所ができたばかりの頃は、売れていた当時に繋がりがあつた知り合いや、芸能関係者の会社を走り回つて仕事を探した。彼の音楽性はどちらかといえば異端的だつた。1部の熱狂的ファンを覗いては、一般的に広く受け入れられる音楽ではなかつた。「あの人が書く曲は売れない」セイジが音楽関係者たちから完全に孤立してしまつと、周りの人間はそうしてセイジから離れていった。

しかしここにきて、自身がプロデューサーするバンドがようやく軌道に乗り始め、2ヶ月前に楽曲を提供した若手アーティストとの仕事も大詰めを迎えていた。セイジは仕事に奔走する日々を送っていた。

あなたが蝶ならば、私は花になる。暗闇の中で誰よりも匂い立つ美しい花に……。

それからの私は、セイジに認められることがすべてになってしまった。私が考えていたのはいかにあの人を繋ぎとめておけるかだった。あなたに愛されることが今の私のすべて。

あの人は誰かに捕らわれて生きること何よりも嫌っていた。彼という自由な存在に、私は何より憧れた。だから私も、彼が何にも束縛されずに生きることを望んだ。

どんな障害も自分で乗り越えていけるような強さ。

それが桂セイジの中には存在するのだとおもっていた。彼の存在こそが、私の美しいと思っていた生き方そのものだ。

しかし、あの人に受け入れられたいと願うことは、同時に私がそうした感情に執着して生きるということにもなる。その矛盾に私は苦しんでもいた。祖母のような女になりたくないと思っていた自分との間には葛藤が生まれていた。

まだ出会ったばかりなのに、どうして感情がここまで高ぶってしまったのか分からなかった。父のことが思い浮かんだからなのか？しかしセイジはきつと、私のことなど何とも思っていないのだろう……。セイジには、たまに突き放すような冷たさを感じる時があった。……。いや、それは当たり前なことだ。私たちはたまたま出会ってしまっただけの関係。きつとセイジは、私が彼に固執せず、以前の私のままでいることを望んでいるのだろう。だけどまだ私がそれを受け入れられないでいるだけなのかもしれない。

いつのまにか、私は今まで異常に仕事に没頭するようになっていった。そうしてがむしゃらに前だけをみつめ続けていけば、いつかセイジはこちらに振り向いてくれるのではないかと。ただ、もう孤独を埋め合わせる場所を私は必要としていなかった。私の心はあの日から、あなたの部屋に置いてきたのだから……。

「藤さん、ご指名です。」

ボーイが呼びに来た。藤がテーブルに来ると、ネクタイを上まで

閉めた、まじめで神経質そうな男が座っている。髪の毛をきつちり固め、黒縁のめがねをかけた青白い顔。細い目で、藤の体をじろじろとみている。

「やあ、こんばんは」

「こんばんは。失礼します。」

客は店の一番高いシャンパンを注文した。男は弁護士で、最近藤を指名するようになった客だった。男は静かに最近の政治や社会問題の話をはじめた。藤も黙って耳を傾けていた。男は今の日本の制度や法整備について熱く語っている。気づくと、男の後ろに回した手が、藤のお尻に触れている。藤は気にせず座っていた。テーブルの隣に座っている団体客の騒ぐ声が気に障るのか、時折ちらちらと隣をにらみつけては、不機嫌そうに青筋をたてた。耐え切れなくなつてボーイを呼んではクレームをつけた。

隣の席では、地方から六本木を観光しにきていた団体が入っていた。流暢な関西弁で大声でしゃべっている。酒はどんどん運ばれてくる。顔を赤らめた中年の客が、面白おかしく騒いでいる。六本木の店では観光できている客も珍しくはない。またビジネスで日本にやってきている外国人も多い。そうした観光客や外国人にとって、夜の街は観光名所のようになっている。しかし、そうした団体の席では、次の指名につながる客はほとんどいない。自分の客を呼べず、手の空いている女たちは、そういう団体客の席に着かされてしまう。テーブルにつく女たちは、誰もしらけた様子で話を聞いている。ごちやごちやとしたテーブルをながめては、羨ましそうに他のテーブルを見ている女もいる。

弁護士を接客していると、また次の指名が入った。藤は2つのテーブルを行き来しながら、同時に接客をこなしていた。

藤はどんな人間であっても、自分に興味を示した男は必ず自分の客にした。藤を指名する客はどんどん増えていった。あの本間も、相変わらず藤のもとへ通いつめていた。そのかわり、足の遠退いている客はどんどんきり捨てた。どんな男にも、魅力的にみえるよう振

舞った。他の同僚たちは影で、藤の悪口や不平をもらしていた。藤への批判は明らかに以前より強まってきた。

蓮花も、今日は先程の団体客の接客にあたっていた。その後も、彼女はセイジとの関係と続けているようだった。セイジは今までと同じように、たまに店に現れては、蓮花を指名した。藤と蓮花はいままで通り、中のいい友人として付き合っていた。

しかし、蓮花は会っている時のセイジの素振りや、店にやってきた時に藤に向けられる視線から、2人の関係に勘付いているようだった。実際、最近の蓮花の視線には、藤に対する敵意がひしひしと感じられた。セイジも店でのそんな蓮花の張り詰めた様子を見て、楽しんでるようだった。

藤は、蓮花がセイジを慕っていることを知りながら、セイジに抱かれることに罪悪感をもつことはなくなつた。その代わり、店にやってくるセイジを見ても、藤は蓮花に嫉妬してはいなかった。蓮花とセイジを取り合うことになど、全く興味がなかった。嫉妬がましいプライドの張り合いなどくだらない。セイジへの思いが藤の心を強くしていた。その姿は、まるで気高く咲き誇る藤の花のように、この夜の街で華やかに匂い立っていた。

セイジの部屋。

白のベールで囲まれた世界では幸せな時間が流れている。

背もたれに腕をかけて、彼が寝そべっている。セイジの痩せていて線の細い体は、ある意味女性らしい。彼の蝶を指でなぞる。彼がその手をとってそっとキスをする。セイジは私の体を持ち上げた。彼の柔らかい髪に、私は顔をうずめた。セイジは私の胸にうずくまった。彼の頭を抱きしめる。セイジの手が私の胸をつかんで、そのまま唇でゆつくりと愛撫を始める。揺さぶりと激痛を交互にくりかえしながら、それはだんだんと快感に変っていく。

天窓にうつる灰色の空を、2人はベットから見あげていた。タバコをくわえる薄い唇ときれいな指、煙を吸うときの眉を寄せる表情

が、私の妄想を掻き立てる……。

「俺が藤くらいの時は、今と違って外で汗水たらして働いてたかな。俺の親父は怖くてね。ガタイもよかったし。でもミュージシャンになりたいって言って家飛び出して。」

セイジは笑いながら語っている。タバコの煙が頬を伝う。

「何で歌手になりたいと思ったの？」

セイジは藤の目をみながらいった。

「……俺は嫉妬の塊だよ。芸能人になるようなヤツってみんなそうなんじゃないかな。みんなに自分の力を認めさせたい。ステージに立つてるとき、俺も何回か経験したんだけど、自分の中のそういう嫉妬する気持ちを越えられる時がある。そのときだけは、周りのすべてを抑えて……俺がすべての人間から嫉妬される側の人間になれる瞬間ね。はじめて安らぎを得られた気がした。」

藤は真剣に聞いていた。だんだんセイジの目つきが変わった。

「昔売れてた時、みんなが俺の音楽をいって言うてくれた。あいつはカリスマだって……嬉しかったよ。俺の音楽が世間に認められたと思った。でも実際は違ってたよね。周りにいる俺の機嫌ばかりとってたやつらは、俺が作った金に興味があっただけ。俺の音楽は、いかに人と違っていられるかなんだよ。だから俺は他のヤツらの指図はうけない。俺の音楽に絶対口出しはさせない。」

セイジの顔に、怒りがみなぎった。はじめて見る怒った表情。藤は寂しかった。セイジの横顔が、なぜか悲しかった。

孤独と怒り。

セイジの前にあるのはただそれだけだった。セイジはこの日珍しくよくしゃべった。藤は考えていた。なぜ自分がセイジに父親の姿を重ねてしまっていたのか。

ああ。一人……この人はこれから、ずっと一人で行くんだ。誰にも手の届かないところへ……そうか、あなたは私にあるものと同じ孤独の闇を抱えている。どんな障害も自分で乗り越えていけるような強さ、それを彼は持っていると感じていた。だからこ

そ、私はこの人に惹かれているのだと・・・。
けれど、それは違った。この人はそんなに強くない。
私が彼に惹かれていたものは、自分と同じ弱さを抱えていたからで
・ ・ 誰にもない強さを求め続けているのは、この人のほうだ。

「俺、奥さんには感謝してるんだよね。」
彼は唐突にはじめた。

「あいつはずっと俺の音楽を褒め続けてくれてたから。よく結婚していることを隠したり、離婚してるミュージシャンはたくさんいるけど。俺は妻と呼べる人はこの世でたった一人でいいね・・・死ぬまで。」

セイジは真剣な顔をしていたが、何か考えている様子だった。また、いつもの暗い影を落としていた。

藤がはじめてセイジの口から聞く、妻を語った言葉だった。藤は胸を突き刺されたような想いがした。それは分かっているけれども、口に出して聞きたくない言葉だった。

セイジの妻の存在。これまで彼は、自分からそれを悟らせるような素振りは一切見せなかったし、ましてや妻のことを会話に出したりは決してしなかった。最初に出会ったときから、藤は、妻のことを、自分がどうあがいてもたどり着けない存在として、どこかで半ば黙認し続けてきた。それは他の客と接しているときでも同じだった。

しかし、今心の中で次第に大きくなってゆくセイジを前にして、藤は妻の存在を初めて意識した。それを嫉妬とよぶべきなのか？もうそんな感情など乗り越えたつもりでいた藤には受け入れがたいものだった。

しかし、彼はこれほどまでステージに立ち続けることを懇願していないながら、なぜあつというまに表舞台から姿を消してしまったのだろうか？

藤はその疑問をセイジに聞くことは出来なかった。そこに、藤が知

らない大きな問題が横たえている気がして……。ただ、奥さんのことと何か関係があるのではないかと思った。でもそれは彼の妻を知らない彼女には到底、憶測の及ぶはずがないものだった。

刑務所の朝は早い。5時に一斉に起床し、7時から工場での作業が始まる。工場は刑務所と同じ敷地に隣接されており、作業は午後6時まで続けられる。藤はそこで、部品を組み立てる仕事をしている。ここで稼いだ金は、出後の支金として返還される。作業中、私語は厳禁とされ、厳しく監視されている。軍手をしているとはいえ、寒さで指が悴んでいる。ここでの生活は苦しかったが、もうすぐ出所できると思えば、藤はどんなことも耐えられた。外では、清掃をしている作業服の収容者たちが見える。中庭の芝生は暖かく、春の兆しを感じられた。

その夜も、気温は低く寒かった。ドアの間隙から冷たい風が吹いてくる。藤は疲れていたが、なかなか寝つけなかった。

寒い寒い冬の日、暗い森の中を、男と女は歩いている。二人は狂っているのか、それとも凍て付く寒さが二人を狂わせているのか。

男と女はただ黙々と作業していた。二人の歩いた地面には、後から何か引きずったような黒い跡が続いている。不気味な跡は、木の間に縫うように螺旋を描いて、森の深くまで続いてゆく。

すると突然森が開けた。そこにあつた光景に、男と女は目を細めた。その先に待ち構えるのは、残酷なほど美しい風景。まるで地獄に落ちてしまふようなほどに。

空を覆うは灰色の空、澄み切った空気がどこまでも続いている。辺り一面に果てしなく広がる、大きな大きな湖。その透明な水に吸い寄せられるように、二人は岸に降り立った。水辺においてあるのは一隻の小さな舟。

……舟を漕いでいるのはあなた。その後ろにいるのは誰？隠れて

いないで出てきて。

水に落ちる音・・・冷たい、冷たい水が私を包んだ。あなたのきれいな指が、私の足をつかんでいる。その隣にいる、見たこともない女人。二人は笑っている。とても楽しそうに笑っている。二人の手が、私の体を沈めている。水面に広がった、私の長くて美しい髪の毛。あなたの顔、どんどん見えなくなってゆく。沈黙の湖の底へ、私が沈んでゆく・・・。

藤は、水の雫が落ちる音で寝覚めた。また、夢を見ていた。藤は起き上がると、独房に備え付けてある洗面台に立った。蛇口から水が漏れている。彼女は蛇口を閉め直しながら、鏡で自分の顔を見た。私の若くて美しい肌はまだあなたを忘れてはいない。あなたは、今でも青年のような姿をしているのだろうか？

藤はふと、あの部屋にあったオブジェが鳴る音を思い出した。水滴が落ちてくるような規則正しい金属音。そのオブジェは、天井から糸で吊るされた玉が、くつつきあって並んでいる。端の玉を浮かせてぶつけると、振動は真ん中の玉を伝って、最後の玉だけを浮かせる。最後の玉はまたぶつかって振動を最初の玉へと伝える。永遠と続く法則が、規則正しい間隔で音をはじき出す。

いや、果たしてその運動は永遠に続くものだろうか？その規則正しい振り子の運動は、動き出したその瞬間から、狂い始める・・・
徐々に、ゆっくり、ゆっくりと。

夕方、セイジと咲子は自宅マンションのエレベーターにいた。病院から退院した咲子は、車椅子に乗っている。最上階に着くと、セイジは車椅子を押してエレベーターを出た。咲子はうつむいたまま、うつろな目をしている。セイジはそのまま通路を通って、自宅のドアの前へと咲子を運んだ。車椅子を玄関に入れると、ドアがゆっくりと閉まってゆく。

突然、咲子が手を伸ばして、閉まるドアに手を掛けた。

「どうした？・・・自分で立てるか？」

セイジは彼女を覗き込んだ。

咲子はうつろなまま、セイジと目を合わせようとしない。セイジは彼女を抱きかかえると、ドアを閉めた。妻の体は軽い。彼は咲子を抱きかかえたまま、寝室のベットに横にさせようとした。

「めて」

セイジの肩を、咲子は強く握り締めた。

「ああああああっ」

咲き子の声は最初はか細く、だんだん大きくなって、怒りに満ちた怒鳴り声に変わった。咲子はいきなり凄い力でセイジの手を振り払った。

「またここへ閉じ込めるのねっやめて！お願いだからもう閉じ込めないでええええ」

セイジは驚いて言葉をうしなった。

彼女は突然立ち上がると、凄い力でセイジをベットの上へ突き飛ばした。

「あなたは私をここへ閉じ込めて、自分は他の女の所へいくんだわ！私だけ、あなたは私だけの・・・」

咲子は素早く馬乗りになって、骨ばった手でセイジの首を絞めつけた。爪が食い込む感触。

「やめる！」

「る・・・してやる、ころしてやる。ころしてやるころしてやる！

ころしてやる。ころしてやるころしてやるころしてやるころしてやる！

恐ろしい光景だった。背筋に悪寒が走る。手を解こうとするが、咲子は力を緩めない。憎しみと怒りで歪がんだ顔。大きく見開かれた目はその下の皮膚に深いしわが刻まれている。殺気立った目がこちらをにらみつけている。だんだん前が見えなくなってきた・・・耳

が聞こえない。

セイジは力づくで咲子を投げ飛ばした。痩せた咲子の体は、ベットの下に投げ出された。セイジは咳き込んで倒れこんだ。腕が痺れている。喉がヒューヒューとなり、激しい呼吸をする。じつとりつと汗がでてきて、首筋を伝った。

「わたしだけの、わたしだけの、・・・」

咲子は、同じ言葉を繰り返しながらガクガクと震えだした。

灰色の空の下、もう日が沈みかけたフェンスとガードレールに挟まれた道路。狭いガードレールの脇を、セイジは一人走っていた。その下には線路が通っていて、電車がおぞましい音をたてて通り過ぎて行く。先に見えるトンネルの入り口には街頭がついている。後ろから追い抜く車のライトが、コンクリートの壁を照らして、スプレーで書かれた落書きがあちこちに見える。セイジはまるで逃げ惑うように走った。息を切らしながら。何かに追われているように後ろを振り返る・・・。冷たい突風が背中を襲った。

高層マンションの最上階は、下のコンクリートの街をどこまでも見渡せる。どんなに遠ざかっても、その視界からは決して逃れることはできない・・・。セイジはそこから逃げるように、走っていた。

咲子と、咲子がいる部屋から。

彼は恐れているのだろうか。あの部屋を・・・。暗がり息を潜めた、咲子の恐ろしいあの目が、どこまでもセイジを見下ろしているような気がした。

2ヶ月後、東京はもうすっかり秋になった。表参道のけやきの紅葉は美しく。道は落ち葉でしきつめられている。明治通りの交差点のあの広告は、もう違う写真に張り替えられていた。原宿の通りにあるレコード店にはセイジが楽曲を提供したCDが大量に並べられていた。店先に張られているポスターには、アーティストの名前と一

緒にセイジの名前が大きく載っている。あの人はこういう仕事をしているのだ。藤は改めて感じて嬉しかった。

藤が小学校、中学校時代の頃は、CDは飛ぶように売っていて、売り上げがミリオンセラーを記録することもしばしばだった。ここ何年かで、CDはほとんど売れなくなった。今ではレコード店の数もずいぶん減ったような気がする。去年、祖父の葬式で岐阜の田舎に帰ったときにみたが、学生時代みんなで競い合っただけで並んだ地元のCDショップも、つぶれていた。

夕方の六本木。灰色の空。まだ5時前だというのに、ずいぶん暗くなるのが早くなった。これから街は長い夜を迎える。藤は客と同伴のためタクシーの中にいた。

最近はずばらくセイジと会っていない。相変わらず寝ないで忙しく働いているのだろう。蓮花なら何か知っているだろうか？しかしここ暫く店にも顔を出していない。今頃何をしているのだろう・・・。客との食事を終えて、店に着くと辺りは真っ暗になっていた。今日は星も出ていない。店の中はジャズの音楽、グラスを運んでくる音と人の歓声が混ざり合っただけで忙しく動きまわっている。ここはいつもと何も変わっていない。

深夜、閉店時間を過ぎても帰らない客がまだ数名いた。

「送り来ちゃうから、みんな先あがっていいよ。」

店長はそういうと客のテーブルに歩いていった。

「お疲れさまでした。」

着替えを済ますと、藤は荷物を持って外へ出た。冷たい秋の風が吹き荒れていた。あいかわらず働き詰めの生活を送っている藤の体は疲れきっていた。毎日一人で帰宅する日々が続いている。

・・・会いたいな。

藤は携帯をみた。自分から連絡しても、セイジが電話に出ないことはわかっていた。

しかし藤は代官山で車を降りた。足は自然とあの部屋に向かっていった。暗い住宅地の間を藤は一人で歩いていた。少し奥まったところ

にある古いレンガの建物。彼女はその入り口までやってきてしまった。

すると向こうから、男が一人歩いてくる。だんだんゆっくりこちらに歩いてくる男をみていると、セイジだった。藤は連絡もせずここまで来てしまった自分を少し咎めたが、久しぶりにみるセイジの姿に喜びを隠し切れなかった。

「セイジ。」

藤は気まずいながらも声をかけると、歩いていった。向こうもすぐに自分と分かったようだ。セイジに驚いている様子はない。サングラスをかけてはいるが、様子がおかしい。

虚ろな目で疲れきった表情をしている。顎にはうっすらと髭が生えている。

「藤？」

「ひさしぶり」

「お前どうしたの？」

「ごめんなさい。会いたかったから・・・セイジ何かあったの？辛そうだけど・・・」

「ああ、俺？今仕事終わって送ってもらったところ。」

藤は心配そうにセイジを覗き込んだ。

「大丈夫だよ。最近あんま寝てないから、疲れているだけ」

そういうとセイジは、いつもの余裕のある表情に戻った。

「会えて嬉しいよ。」

普段のセイジを感じて、藤はすこし安心した。二人は建物の中へと入っていった。

久しぶりに来たこの部屋は、あれから何も変わっていなかった。あたりまえのようにここにある部屋。セイジは入るとすぐにベットに折れ込んだ。藤はセイジの代わりに蝋燭に火をつけた。セイジはその様子をじつと目で追っている。

「こつちにきて藤。」

「・・・」

2人は抱き合うと、黙ってキスをした。長い時間、二人はそうして抱き合っていた。

「めなんだ……。」

セイジが何か言った。

「え？」

セイジの体を少し離して顔を見る。

「だめなんだ。」

セイジは思いつめたような顔をしている。初めてみるその表情に、彼女は目を疑った。

「どうしたの？」

セイジは仰向けに横たわると、藤の肩を抱いた。苦しそうな顔。明らかにもと様子が違う。

セイジはタバコをふかし始めた。その姿にはまた、セイジのいつもの貫禄が蘇っていた。

「今ほどあいつを怖いと思ったことはなかったよ。」
「……。」

藤は一瞬とまどった。あいつとは誰のことなのだろう。

「悲しいよね。いつかは思いが通じ合った二人がさ、今はこんなに憎しみあってるなんて……。」

セイジは枯れた声で少し笑った。

「……奥さんのこと？」

「そう。……あいつはもう変ってしまった」

2人は沈黙した。セイジは煙を吐きながら、しばらく窓に映る近くの間をみつめていた。

「藤、ずっとここにいていいんだからね」

二人はそれから眠りに落ちていった。静かな部屋に、水滴のしたり落ちるような規則正しい音が響いた。

ここは、深い深い湖の底。藤の意識は水の中を漂っている。音は

何も聞こえない。青い静かな光の中を、藤は仰向けに泳いでいる。突然すさまじい音とともに、大きなシャンデリアが水中に飛び込んできた。水のなかに白い泡が渦巻いている。藤の手足は動かない、彼女はその泡の中に消えていった。

花瓶の割れる音に驚いて、彼女は飛び起きた。机に置いてあった花瓶だ。粉々に砕けた破片がちらばって、あたりは水浸しになっている。さしてあった花は無残にむしりとられている。

セイジがいない。

血の気が引いてゆくのを感じた。藤はキッチンに走っていった。藤の足元に転がっていたのは、小さな注射器。その先には脱力してしゃがみこむセイジの姿があった。彼はうつすらと汗をかいていた。藤は駆け寄った。

「セイジ!？」

セイジは憔悴しきっている。瞳孔は開いたり閉じたりしている。

「いい気分だ。藤……」

セイジは上を見上げた。その目は視点が定まらない。彼は今、快樂の頂点にいた。

しかし、次の瞬間、彼の目にはみるみる悲壮の影が浮かびあがってきた。眉間にしわをよせ、苦しみだした。少し指が痙攣を起こしている。藤は怖くなったのセイジを抱きしめた。

「だめなんだ……」

藤は顔を上げた。

「俺は遠ざけてしまっただ。俺はそういう愛し方しかできない。あの恐ろしい女……まだ俺を追いかけてくる。」

藤はセイジが何を言ってるのか、さっぱり分からなかった。

恐怖。

このときのセイジは恐怖に包まれていた。

彼は妻を恐れているというのか？

狂ったように怯えだしたセイジを見て、

藤はただ恐ろしくて、彼を抱きかかえたまま泣いていた。

「藤、わかつてくれるよな・・・お前だけだ。俺にはお前だけだ・・・」

セイジは彼女の髪をなでた。薄暗いキッチンで、二人はただ抱き合った。

その後、藤はあの時のセイジの姿を思い出しては心を痛めていた。衝撃的だった。あんな風になったセイジを見たくはなかった。あの晩、セイジがいったことから察するに、彼の妻との夫婦関係は崩壊しているようだ。世間で流れている噂は本当だった。セイジが覚せい剤をやっていたことも・・・。

遠ざけてしまっただ。あの時彼は言っていた。藤はなんとなく理解していた。彼はなにより束縛されることを嫌う人だ。常に自由でありたいと願っている。妻はセイジのことを誰よりも理解していた。でも愛しているから、彼女はセイジを独占したかった。そんな妻からセイジは自然と遠ざかってしまったのだろう。同じようにセイジを愛する藤には、妻に同情する気持ちもあった。セイジは昔から女遊びが激しかった。奥さんはずっとセイジの浮気癖に悩まされて来たのだろう。束縛や独占欲は愛情からくるものだから仕方がない。しかし彼のような人を愛していくには、それが宿命でもある。けれどこういったことは世間ではよくある話だ。

“あいつはもう変わってしまった”とはどういうことなのだろう？

奥さんはよほど嫉妬深い女なのだろうか？しかしそれにしては、セイジのあの思いつめた行動は異常だった。薬のせいで何か恐ろしい幻覚でも観ていたのだろうか？

それに、“俺はそういう風にしか人を愛せない”とは、まだ奥さんを好きでいるということなのだろうか？

いや、それはあのセイジの様子からは考えにくい。もう彼は妻を愛

してなどいないだろう。それどころか、彼は恐怖で怯えていた。

2人の間に何があったのか？一体何が、あの人をあそこまで追い詰めたのか。考えても考えても答えは出なかった。しかし妻とのことが何か関係しているのだと、藤は直感的にそう確信していた。セイジの苦しみは、自分の苦しみでもあった。

しかし、「俺にはお前だけだ・・・」。あの言葉を思い出す度、藤はうつすらと笑いを浮かべた。セイジは私を必要としてくれている。そう思うと、藤は優越感に浸ることができた。藤はそんな風に思っている自分が恐ろしかった。

六本木に今日も夜がやってきた。楽しそうに笑いながら、ネオン街を通る人々。

藤は蓮花と同じテーブルで接客していた。蓮花とはまだ不穏な空気が続いたままだ。最近目は合っても、軽く挨拶を交わす程度で、もう会話をすることはなかった。蓮花は新人の由香里たちと仲良くしているようだった。藤は店の同僚たちの中では、浮いた存在になっていた。蓮花のもとへは、もうセイジは姿を現さなくなっていた。彼と連絡をとりあっている様子もないようだった。そのことが、さらに藤への対抗心を逆なでする原因のようだ。同僚やボーイたちの会話は、藤がああ桂セイジと付き合っているのではないか、という噂で持ちきりだった。藤はそれを知っても、何も気にしてはいなかった。蓮花は、接客中は藤の隣にいても、嫌そうな態度など取らなかった。客にも藤にもなにくわぬ態度でせつしていた。

この日二人が接客していた相手は、音楽業界では名の知れたレコード会社の人間だった。1人は40代半ばで、服装はジーパンにジャケットを着てハンチングを被っている。もう一人はその上司らしい人物で、50歳くらいだろうか。黒いストライプのスーツを着ていた。2人は、今の業界についての話をしている。

「日本のレコード店はもう駄目だな。このCDが売れない時代に何の戦略も打ち出せないようじゃ」

「海外ではもう10年ぐらい前から、レコード店にブランドの小物や他のグッズと一緒に並べてるスタイルが主流でしたけどね。」

「いや、最近では日本でもそれはやりだしてるとこあるんじゃないか。でもダウンロードするから、今時わざわざ店まで足を運んで買いに来る客はいないだろう。」

「そうですね。」

「それにしても、最近の日本のアーティストはみんな洋楽っぽい歌い方するやつばかりだな」

「ええ。R & Bの新人もどんどん増えてますし。ロックやバンドはここ10年くらいでだいぶ数が減ってきた。今売れてるのはソロが主流ですかね。」

「日本のロックは落ち目だね。今やそこそこ売れてるのは片手で数える程しかない。」

「ただ最近の流行の音楽を聞いているリスナーは広く浅くだからな。」

「昔のアイドルみたいにバーンと売れるやつはいないね。」

「昔のアイドルと今のアイドルとはずいぶん概念も違ってきますもんね。今はトップをいくアーティストにも、プライベートな話が許される。むしろいろんな角度から話を持ち出していかないと個性が出せないじゃないですか。今はみんな同じような音楽だから。」

「今はなんでもかんでもブログだからな。言っちゃなんだが、今は誰でもデビューしようと思えばできる。」

「そうですね。昔は本当に限られた人間しかデビューできなくなりました。昔みたいに特別な存在としてある意味崇拜されるような子は出てきてませんね。」

「そういえば最近昔の歌謡曲をロック風にカバーした曲が売れてるな。あれアレンジやってるの桂セイジだろ。」

「ああ、そういえば、最近出てきた新人の曲も彼が書いてました。しばらく話に出て来ないと思ってたら、カバーでいきなりいい仕事してきましたね。」

「あいつの音楽は独特だからな。オリジナルは特徴がありすぎる。」

歌謡曲をアレンジすることでそれがうまく緩和されてマッチしてるな。」

「確かに。僕も聞きました。が、バランスがとれてますよね。今はカバー曲ブームですから。これからどんどん出す人増えるでしょうし。金目当てに再結成するバンドも増えてますね。」

「ただ業界の醍醐味は新曲を世に出してなんぼだからな。」
「それが難しいところですね。」

会話のなかにセイジの名前が出てきたので、二人の空気は一瞬張り詰めた。藤は蓮花がこちらをみたのを感じた。藤は黙っていた。

客はそのまま1時間ほど話し込んで、店を出て行った。

藤は裏にさがって、タバコを吸いだした。この店では客の前でタバコを吸ってはいけない決まりになっていた。狭いスタッフルームは、汚れた食器や物が散乱してごちゃごちゃとしている。みんな接客の合間を縫っては、休憩しにここでタバコを吸っていた。そこへ蓮花もやってきた。珍しく藤に声を掛けた。

「さっきのお客さん、桂さんの話してたね。彼元氣？」

「うん、まあ。」

今更白を切つてもしかたのないことだった。藤とセイジの噂はもう誰もが知っていた。

「そう、ならいいんだけど。」

元氣でないとは当然いえない。

「藤。あの人たまにおかしくない？」

「え？」

意外な言葉だった。

「あの人、何か隠してる。だから気をつけてね。」

藤はすこし表情をやわらげて、蓮花をみた。

「うん。そうかもしれない。けどもう私はあの人しかいないの。」

蓮花は了解したように頷くと、表へ出て行った。

セイジが本当に薬をやっていることを、蓮花も知っていた。彼女は藤のことを心配してくれていたのだ。蓮花の表情からは、セイジをまだ好きでいることが読み取れた。セイジを気遣う蓮花の言葉が切なかった。

そんな二人の様子を、近くで竜は黙って聞いていた。喫煙所は二人だけになった。彼は忙しそうにグラスを洗いながら、背を向けていた。

「彼だつてよ。なれなれしいよな。噂流したのもどうせあいつだろ。何吹き込まれても、気にしないほうがいいよ。」

向こうをむいたまま竜が言った。藤は答える。

「蓮花はそんな子じゃないよ。」

竜は、店の中で孤立する藤をいつもかばっては慰めていた。口数の少ない藤に話しかけては、話し相手になってくれた。どんなに影口を言われても、竜だけはいつも見方だった。

「やべ、振られちゃったかな俺っ」

藤は吹き出した。そして竜の背中をそっと抱きしめた。

刑務所の窓から、藤は中庭に生えている桜の木をみていた。枝に生えている桜のつぼみはまだ小さく硬い。3月ももう半ば。時間はあつという間に過ぎていってしまう。妙の幼稚園も、もう春休みを迎えている。もう少したてば、花が咲く時期がやってくる。そしたらこの中庭も、たくさんの桜が咲き乱れるのだろうか。

夜、藤はすぐに眠りについた。

それは、夢か、幻か。

そこには黒い闇の前にたたずんだ彼が立っている。

あなたは相変わらず、寂しい場所にいるのね……。

闇の中、二人の間には大きな大きな湖がある。彼はその向こう岸に立っている。こちらをじっと眺めて、優しく微笑んでいる。さあ、早くこっちへきて……。

手を伸ばすが、こちらを見たまま動こうとしない。藤は冷たい水の中に入って、湖をわたっていく。しかし、湖はどこまでも遠く広がって、向こう岸へはたどり着かない。

彼はタバコをくわえて、手をかざしながらライターで火を着ける。セイジ、私の声が聞こえないの？

彼はツバの大きい帽子に片手をおいて、目深に被りなおすと格好つけてみせる。そしていじわるそうに、ただニヤッと笑った。

タバコを持つ彼の美しい指。目を閉じて、眉を寄せて煙を吸う。気だるく煙を吐き出す。顔の前に煙が立ち上る。懐かしい姿。

どうしてこの人は、タバコを吸うだけでこんなに格好いいのだろうか？彼は横を向いて、そのままいつまでもタバコをくわえている。

やがて彼の姿は後ろの闇に消えた。
あれ？おかしいな？

ああ。そうか・・・あの人はもう死んだのだ。

店を出ると、セイジから着信があったので掛けなおした。一昨日、あんな風になっていながらも、セイジは時間になるとすぐさま仕事に向かった。藤はセイジの様子が心配だった。

「・・・今から話したいことがある。」

藤は送りの車にのると、セイジの元へ急いだ。

到着すると、部屋はいつもの静寂さを取り戻していた。一昨日のできごとが嘘のようだった。セイジもいつもと変わらない。

今日のセイジは、大きなサングラスに黒のツバの大きなハットを被って、上はTシャツに、ワインレッドのライダースを着ている。首には細いストールを巻いている。下は古着っぽいデニムをはいている。この人はこういうおしゃれが良く似合う。

「ドライブでもいかない？」

運転しているセイジを見るのは久しぶりだ。藤は無邪気に喜んだ。ハンドルを握る手にはグローブをはめている。真夜中の道路はすいていた。車はどんどんスピードをあげていく。ガラスに夜景が勢い

よく流れていった。

「一昨日は悪かったね。心配かけてごめん。・・・俺のこと、怖いと思った？」

移り変わっていく景色をみながら、セイジは優しくいった。

「少し・・・それより驚いた」

「そっか。」

「・・・」

二人は少し黙った。

「・・・奥さんのこと、聞かせてくれない？」

藤はやつとの思いできいた。セイジは何も動じていなかった。

「あいつは、もともと一途な性格でさ、俺にずっと尽くしてきてくれた。あいつはだれよりも俺を理解してくれてたよ。だから感謝してるよ・・・。」

セイジは続けた。

「あいつは、俺を支えようとして必死だった。俺はこういう性格だから、あいつの束縛するところが嫌でね。だんだんあいつから離れていったんだよ。あいつが悲しんでるの知ってたんだけどね・・・。」

セイジと咲子が出会ったのはインディーズ時代。セイジの地元のリブハウスで咲子は働いていた。ライブをきっかけに2人は付き合い合うようになった。ミュージシャンになることを両親に反対され、家出同然で咲子と上京してきた。二人の結婚生活が始まった。何とか足がかりをつかんで、セイジは大きなレコード会社からデビューした。会社の力もあり、それから彼が頂点を極めるまでにはあまり時間はかからなかった。

しかし、セイジが売れ始めたころから、もともと一途な性格で束縛が激しかった彼女の性格が、セイジを悩ませるようになった。セイジが遊びを覚えて、クラブに通い出すようになると、咲子の束縛はさらにひどくなっていた。セイジが当時所属していた事務所やス

タジオに毎日押しかけては、夜になるまで出口でセイジが出て来るのを待ち構えていた。

しかし、自宅での咲子はいつも優しくセイジを支えていた。当時からセイジは自分の音楽に対する情熱から、会社や職場の人間と衝突することもしばしばだった。夫を慰めようと、一生懸命にセイジに接していた。そのため彼女の行動を、セイジはそれほど重く受け止めてはいなかった。咲子の束縛の影で、セイジは大勢の女を抱いた。そしてその頃から咲子はクスリに溺れていくようになった。

車は海岸に辿りついた。車を降りると、近くに海を見渡せる場所があった。2人は、その場所にある柵まで歩いていった。誰もいない海岸を眺めながら、二人は目を合わせなかった。もうすぐ夜が空ける。柵により掛かりながら、セイジはゆっくりと、そして静かに続きを始めた。

「でも、その頃はまだ普通だった。あいつが今みたいになったのは、子供を流産してから……。」

藤は衝撃を受けたが、そのまま黙って聞いていた。セイジは前だけをじつとみつめた。

「あいつが病院に運ばれたとき、俺は初めて子供の存在を知ったよ。あいつが薬をやったってわかったときは、責任感じた。子供は俺のせいで死んだ……。」

彼は地平線を眺めていた。闇の中で、枯れたセイジの声がさらに細くなつていくのを聞いた。

「……俺はあいつに俺の子を抱かせてやりたかった。」

ここは夕方の病院。廊下は夕日の真つ赤な光に照らされていた。伸びた窓枠の影が、いくつもの四角い線になって出口まで続いている。窓からは、中庭で遊んでいる子供たちがみえる。夕焼けのまぶしい光に包まれた小さな砂場で。

夫婦は、夕日に照らされながら、廊下に立っていた。どこからが、

赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。

んギヤーンギヤーンギヤーンギヤーンギヤーン

「生まれたぞ！」

「奥さん、生まれましたよ。」

「おめでとございます。」

「よかったですね」

「元気な男のお子さんですよ。」

夫婦は、地平線に溶けてゆく赤い太陽中へ歩いていった。肩を並べた二人の影は長く、長く、どこまでも続いていた。

冷たい潮風が、二人に吹きつけた。暗闇の男の姿を、深い後悔と悲しみが襲っていた。重い空気が流れていた。

あなたは孤独の苦しみを誰よりも分かっていたのに・・・あなたは奥さんから離れていった。誰にも束縛されないうで生きたい。強く、強く輝きながら。そうでしょ？

それがあなたの誇りだったから。でもそうして自由に生きていくには、人は常に孤独の苦しみと戦っていないければならない。あなたは他の女を抱くことでしか、その苦しみから逃れられなかった。

束縛を嫌い、自由を追い求めても、今度は孤独にさいなまれて・・・父も、そんな孤独の苦しみと戦っていたのだろうか？

あなたには奥さんの愛情があつたのに、それでも生き方を変えられなかった可愛そうな人・・・だから、この人は子供を失った。

「それからのあいつは・・・子供を失って寂しかったんだろう。さらに俺を束縛するようになった・・・俺はあいつに立ち直って欲

しかった。」

咲子の奇行はだんだんエスカレートする。セイジを1日中監視するようになった。夜になると、彼女はセイジを探して夜の街を徘徊し始めた。

しかしそんな妻の様子を雑誌のカメラマンが写真に捕らえていた。

咲子の奇行振りには、スクープとなり連日マスコミで報道された。セイジの夜遊びの様子や覚せい剤疑惑までが浮上した。仕事で問題を抱えていた彼を、レコード会社は守ろうとはしなかった。セイジに向けられた世間の目は冷たかった。

「だからやめたんだよ・・・ステージに立つの。歌は歌えなくなっても、俺の音楽は続けられる。その代わりに俺はあいつの治療に専念することにした。もう15年も前の話だけど・・・。」

しかしその騒動をきっかけに、咲子の人格は急変した。彼女の精神は限界を迎えてしまったのだ。薬による高揚感、子供の喪失感と満たれされない心の飢餓を、激しい独占欲の衝動へと変えた。セイジはなんとか妻の精神的な苦痛を取り除こうと努力してきた。しかし暴れる彼女をセイジはもうどうすることもできなかった。

「今のあいつは狂ってしまった。もう俺の知っているあいつじゃない。俺はあいつをただ恐ろしいとしか言えない・・・あいつはもう俺を、自分の“モノ”みたいにしか見てないんだ。」

セイジは手で額を覆った。彼はまた怯えている・・・やはり恐れていたのだ、彼女を。

二人はそこで、長い間立ち尽くしていた。

あなたはなんて残酷で・・・救いようのない人なんだろう。

いつまでも自由でいたい・・・

いつまでも大人になりきれない、この人の子供のような心・・・でも私も一緒ね。

孤独と妻の得体の知れぬ恐怖に、おびえるセイジをみながら、藤は思った。

彼は大きく息を吐き出して、サングラスを外した。

「少し歩こう。」

そういいながら、彼はだんだんいつものセイジに戻っていった。藤の顔をみると、優しく微笑んだ。

ああ、この人は今泣きたいんだ。でもあなたはそんな風にできてはいない。だから微笑むんだ。その中に、精一杯の孤独と悲しみを浮かべて……。

人はみんな泣きながら生まれてくるのに、どうしてそのことを忘れてしまうのだろうか。

薄暗い寂しい海岸を、灰色の空が覆っている。

黒い波が打ち寄せる砂浜を、二人は黙って歩いている。少し先には緑の草がはえた小高い崖がみえる。風が強くなってきた。

崖の下まで来ると、二人は手をつないで崖を登った。

ここから帰ったら、私達はまた辛い現実と向き合わなくてはならない。

私たちは孤独に耐えられないのに、自由に生きたいと願っているどうしようもなく弱い人間。

支えていたい……。あなたのそばですっと支えていたい。

あなたの生き方が私の憧れであることに、代わりはないのだから……。

藤の心は、今少しずつ変わり始めようとしていた。

セイジは、藤をかばいながら一歩ずつ崖を登っていく。

「俺はあいつを、もう愛してない。」

今彼は決定的な言葉を口にした。藤の思っていた通りになった。

セイジはもう妻を愛していない。

藤は、セイジのことを心から支えてやりたいと思う傍ら、彼を独占できた喜びの頂点にいた。前に行くセイジの背中を見ながら、藤は

うつすらと笑っていた。

以前、彼女はあんなにも嫉妬や所有欲に溺れる祖母が嫌いだった。しかし、そんな祖母と同じ血が、自分の中には流れている。硬くつなぐった嫉妬の鎖に、藤は捕らわれまいとすればするほど、逃れられなくなつた。むしろ、セイジを愛しいと思うとき、その嫉妬や所有欲をいとも簡単に受け入れてしまった。

崖を上り終えると、もう空は明るくなつていた。

朝日は、美しく二人を照らした。

コバルトブルーの空には、金色の帯が重なっている。闇から光に移り変わる、その間の美しい世界。海岸の砂は光に照らされてキラキラと輝いた。突風が音を立てて遙か天空へ昇つていった。そのまま上を見上げると、雲が驚くほど早く動いている。彼の表情には、さつきまでの影はない。透き通つた目が、ギラギラとしながら空の色に変わった。藤の目もきらきらと輝いた。

セイジはタバコに火つけようとするが、ライターの火が突風で煽られてなかなかつかない。

「貸して」

藤はライターを手に取ると、手で風をさえぎりながら火をつけた。

「さすが・・・」

セイジはいじわるそうにニヤツとした。気だるく煙を吐き出す。煙は一瞬のうちに突風に吹かれて消えた。

「風強いな。お前寒くない？」

「寒い・・・寒いけどきれい」

「そうだね・・・」

セイジは藤を見て優しく微笑んだ。

「俺はこんなだから、いつまで続くかわかんないけど・・・。できればずっとこうしていよう。死ぬまでずっと」

このとき、二人の心にあつたのは、全く別の感情だった。そして、同じだと思っていた2つの闇は、全く違うものであったことを、藤

はまだ知らなかった。

それから間もなくして、私は店をやめた。住んでいたアパートを引き払い、セイジのあの部屋で暮らすことになった。私が店をやめてまもなく、蓮花も店をやめてしまったことを、後になって竜から聞いた。

ツタの葉が生い茂った狭い通路の奥にあるのは、外界とは別の世界。豪華なガラスのシャンデリア。猫足のアンティークの家具、柄のカーペット、そして天窓から覗いた灰色の空。この部屋にいと聞こえてた、慰めるような優しい音楽。あなたがあの言葉を口にした日から、私の安らぎの時間が始まった。

一緒に住むようになって、二人で過ごしている時間帯はあまり変わらなかった。彼は毎日深夜まで仕事をして帰ってきた。だから感覚的には前と一緒にだった。でも以前はたまに感じられたあの人の突き放すような態度はもう感じられなかった。時折二人を挟んでいた沈黙は、お互いの気持ちを感じる間に変わった。あの人は、私と過ごす時間をなによりも大切にしてくれていた。それは私も同じだった。

食事をするとき、あの人はいつもストローで飲み物を飲んだ。彼の小さくて薄い唇は、まるでタバコとストローをくわえるためだけに、あるように思えておかしかった。

「ビールとワインあるけど、どっちにする？」

「ああ、俺お酒飲めないから」

「え？そうだったの？」

私は笑った。彼はいかにもロックグラスが似合いそうなのに。

「今日帰りに店で徹也にテキーラ飲ませられそうになっちゃって。俺テキーラなんて飲んだら一発で死ぬ。なめただけで死んじゃうから。」

お前のところに着く前に死んじゃったら楽しめなくなっちゃう」

二人で笑った。徹也とは彼が自分の事務所で可愛がっているスタッフだ。

「あと辛いのはダメね、カレーも甘口しか食べられない」

セイジは柄にもなく、コーヒーも甘いコーヒー牛乳しか飲めない。

二人はいつもよく笑った。

あの人は寒いのによく大きな窓をあけて、格好つけてカーテンの裾に座った。そしていつものようにタバコをふかしながらギターを弾いた。私はここで暮らしはじめてから、あの人がギターを持って歌う姿を初めてみた。ギターを持つと、やけにしっくりとくるせいか、貫禄があつて大人っぽかった。あの人の歌う横顔は時折苦しそうで、とても官能的なオーラを放っていた。手元をみつめる目はキラキラとしていた。私はあの人の歌をきくたびに、胸をときめかせていた。外はいつも夜だったけど、ここはいつも日だまりの中の部屋だった。

「藤・・・高貴な美しさの象徴か」

「よく知ってるね」

「あらあら、俺これでも作詞家なんですけど。花言葉くらいなんでも知ってるよ。」

セイジが得意そうにいつて苦笑する。

「うそ。今日事務所のネットで調べた」

彼はいじわるそうにニヤツとした。藤も苦笑した。

それは徐々にだったけれども、藤はセイジを覆っている影や恐怖心がなんとなく薄れていくように感じていた。実際、あの時のように怯えて極端な行動にでることもここにきてからなくなった。セイジの微笑みに浮かぶ孤独は決して変わってはいなかったけれど、彼は精神的には安定している様子だった。藤にはそれがなによりの幸せだった。この時間がいつまでも続けばいいのと思っていた。

しかしその部屋にある振り子の規則正しい音は、その瞬間も確実に狂っていつている。そのほんのわずかなずれに、藤はまだま

まったく気づかないでいた。

ある日の午後、藤は表参道を歩いていて、並木道のけやきはもう枯葉がすべて落ちて、殺風景な枝だけになっている。見あげる空はどこまでも高く、空気は乾燥していた。

秋も終わりに近づいた。これから厳しい冬がやってくる。寒いのは苦手だ。

藤は一通り買い物を済ませると、青山方面へ向かうため、参道の裏道を通った。コンクリートで囲まれた美容室の角を曲がると、そこにはったり蓮花が立っていた。二人は同時に気づいた。

「あ、藤！」

蓮花が驚いて叫んだ。藤は嬉しくなって笑顔になった。

「蓮花久しぶり！元気だった？」

「元気だよ。偶然だね！何してるの？」

二人は笑いあった。

「たまたま買い物してたところ。蓮花は？」

「私ここの美容院にいったんだよ。髪染めてみたんだ。今帰ろうとしてたところ」

蓮花は毛先を触ってみせた。藤は蓮花の髪をみた。確かに、最後に見た印象とはちがっている。

2人は青山通り沿いに面したカフェで話をすることにした。ドリンクを持って、2回にある喫煙席へと向かう。

「店やめたんだって？」

「そう。藤がやめてすぐにやめちゃった。今は他の店で働いてるんだ。同じ六本木なんだけど」

「そっか。」

「藤は今何してるの？」

「私今セイジと暮らしてるんだ。」

蓮花は藤をみた。

「そっか。仲良くやってるんだね。」

蓮花はそれだけ言うと、何か考え込んでいる様子で少し黙った。

「藤、私は心配なんだよ。あの人が藤を何かに巻き込むんじゃないかって。あの人が、どうも得たいが知れないんだよ。」

蓮花はセイジが薬のせいで、情緒不安定になっっていることを言うてるのだから。

「確かに、それは分かってはいるけど・・・最近では落ち着いてきているんだよ。」

「そう、藤がそれでいいなら構わないんだけど。私が首突っ込んだり悪いし・・・」

彼女はそういつたが、蓮花はまだ心配そうだった。そして、意をけつしたように話し出した。

「私聞いたんだよ。前に由香里と一緒に食事に連れてってもらった時。あの時桂さんともう一人、同僚の徹也さんという人が来たんだけどね、その人が言っていたんだ。あの人が、たまに仕事にいないくなるらしくて、連絡も取れなくなる時があるんだって」

藤は耳を疑った、蓮花を見る。

「一回事務所のスタッフ全員で探しにいったこともあるらしいよ。仕事先には秘密にしたから大事にはならなかったらしいけど・・・それに。」

「それに？何？」

藤は少し身乗り出して聞いた。

「あの人の奥さん、家からめつたに出てこないらしくて・・・病院にも何回も入院してるみたい。徹也さんが言うには、あの人はわざと奥さんを家に閉じ込めてるみたいだっていっていた」

藤は少し動揺した。わざと閉じ込めるなんてことを、セイジがするだろうか？彼女は信じられなかった。

「徹也さん、真剣な顔して言っていたからさ・・・冗談じゃそんなこといえないでしょ。」

蓮花の声は徐々に小さくいつて塞ぎこんだ。

2人は一瞬沈黙した。

「変なこといってごめん。でも藤に言わないでおくのは私も辛かったんだよ。あの人が隠してるよ。」

蓮花の話し方はなにか、得体の知れないものを怖がっているように聞こえた。

空が曇ってきた。

「そっか・・・ありがとう。心配掛けちゃってごめんね。」

藤は蓮花を覗き込んだ。そして精一杯の笑顔を浮かべてみせた。

「話してくれて嬉しいよ。でも私は大丈夫だから、あんまり心配しないで。あの人が何か隠してるんだとしても、私にはもうあの人がいないの・・・」

それは蓮花が以前にも聞いた言葉だった。蓮花は優しく微笑んだ。

「そっか、なんか少し安心した。そんな風に相手を思えるなんてステキなことだね。」

藤は黙って頷くと、窓の景色に目をやった。

「私、竜ちゃんと付き合ってるの。」

「マジで!」

藤はびつくりして明るいうちでいった。

「藤が辞めちゃったあと、すぐくらい。だからまだ付き合いだしたばかりなんだけどね。それで店やめたの。」

蓮花は照れくさそうに話す。藤はそれをみて嬉しくなった。

「よかったじゃん。二人お似合いだよね!」

藤はいつまでも喜んでいて、二人がこれから幸せになって欲しいと、心から思った。

二人とも楽しく笑いあった。

空はさつきよりも雲が増え、暗くなってきた。蓮花は時計をみた。

「私そろそろ仕事の時間だわ。」

「そっか、なんか雨振りそうだから気をつけてね。」

「うん。じゃあ行くわ。またなんかあったら連絡してね。」

蓮花は手を振ると、階段を下りていった。

蓮花がいなくなってしまうと、藤は突然言いようのない不安に襲われた。

彼女は窓から、車と通行人が混ざり合う、青山通りを眺めた。上からは、人が歩いている頭しかみえない。群れを成してやってくる人の顔がうごめきあっている様子を、彼女はじっとみつめていた。

この世にどれだけの人間がいて、その人たちはどれくらいたくさんの顔をもって生きているのだろうか？

藤は目を閉じた。長い間、藤の中で渦巻いていた疑問が、今自分の体の中に、冷たい氷の塊のようになって残っていた。

あの人は、毎日私のところにやってくる前はどんな顔をしているのだろうか？

奥さんと会っている時・・・そして以外は　　？

セイジは一人でいるとき、一体何をしているのか？そしてどこにいるのか？藤はまだセイジが自分に見せたことのない顔を見たいと思った。しかしその思いは、とてつもない不安とともに、藤のもとへやってきていた。

外は雨が降り出した。藤は買い物袋を諦めてまっすぐ家に帰った。

咲き誇れ藤の花〜私は灰色の空の下をどこまでもいける〜（後書き）

20代の若い女性向けに書きました。自身の体験をもとに、よりリアルに描くことを心がけております。人の内面やの生き方をもう一度問い直せるような作品にしたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6680d/>

不二

2010年11月14日09時14分発行